

向 田 遺 跡  
発掘調査報告書

1996

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

むかい だ  
向 田 遺 跡  
発 掘 調 査 報 告 書

平成 8 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、向田遺跡の調査成果をまとめたものです。

向田遺跡は山形県北西部の酒田市に所在し、「出羽富士」の異名を持つ鳥海山を仰ぎ見る肥沃な穀倉地帯である庄内平野北半分のほぼ真ん中に位置します。遺跡のすぐ北側には鳥海山の雪解け水を集め、麓を潤す日向川が流れ、東南約7 kmには古代出羽国の国府と擬定されている国史跡、城輪柵跡が、同じく東南約3 kmには中世留守氏の居館であった県史跡、新田目城跡などの様々な遺跡が近隣にあります。

この度、県営ほ場整備事業・西荒瀬地区に伴い、工事に先立って向田遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、平安時代初頭から中頃にかけての遺物とともに掘立柱建物跡や井戸跡などの遺構が検出されました。その内容は本報告書に書き留められたとおりです。自然地形に沿って立地する建物、それを取り巻くように配置された畑跡と想定される畝状遺構など、当時の人々の暮らしぶりに思いを馳せることが可能です。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、先祖が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民財産といえます。この先祖から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えて行くことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成8年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 木場清耕

## 例 言

- 1 本書は山形県庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所の県営ほ場整備事業（西荒瀬）地区に係る「向田遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県教育委員会の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名	向田遺跡（ASTMD）	遺跡番号	平成6年度登録
所在地	山形県酒田市大字本楯字向田		
調査期間	発掘調査	平成7年4月1日～平成8年3月31日	
	現地調査	平成7年5月8日～平成7年7月6日	
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
発掘調査・整理作業担当者			
	調査第一課長	佐々木洋治	
	主任調査研究員	野尻	侃
	調査研究員	石井	浩幸
	調査研究員	斉藤	健
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区、酒田市教育委員会等関係機関の協力を得た。
- 5 現地調査における平面図（1/20・1/40・1/100）の作成は空中写真測量によっても行いその業務を株式会社パスコに委託した。
- 6 本書の作成・執筆は石井浩幸、斉藤 健が担当した。編集は尾形與典が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。
- 7 出土遺物、調査記録類については財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下のとおりである。

S B…………掘立柱建物跡	S K…………土 壙	S G…………河川跡
S D…………溝跡 畝状遺構	E B…………柱 跡	S P…………ピット、小穴
S E…………井戸跡		
R P…………登録土器	R Q…………登録石製品	R M…………登録金属製品
R W…………登録木製品	P…………土 器	S…………礫
		W…………木製品

2 遺構番号は現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲したが、土壌については本書で新たに付したものがある。

3 報告書の執筆は下記のとおりである。

- (1) 調査概要図 遺構配置図 遺構平面図中の方位は磁北を示している。
- (2) 調査区に設定したグリッドの南北軸はN-10°-Eを測る。
- (3) 遺構実測図1/20・1/40・1/80・1/400で採録し、それぞれにスケールを付した。
- (4) 土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土はFを付して区別した。
- (5) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
- (6) 遺物実測図・拓影図は1/2・1/4・1/10縮尺で採録したが、遺物図版に関しては1/3を基準とした。そしてそれぞれにスケールを付した。  
土師器・あかやき土器の断面は白抜き、須恵器についてはベタ黒で表示し、瓦片・中世陶器はスクリーントーンで表示した。
- (7) 堆積土層・遺構覆土の色調記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新基準土色帖』に拠った。

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 調査の概要	3
II 遺跡の立地と環境	
1 自然環境	4
2 歴史的環境	4
3 遺跡の層序	6
III 遺 構	
1 遺構の分布	8
2 掘立柱建物跡	11
3 土 壙	12
4 井 戸	15
5 溝 跡	19
6 畝状遺構	20
7 河川跡	20
IV 遺 物	
1 土 器	23
2 土製品	24
3 石製品	24
4 木製品	24
V まとめ	
1 調査のまとめ	32
2 庄内地方の井戸跡について	32
報告書抄録	35

## 挿 図

- |      |                         |      |                                  |
|------|-------------------------|------|----------------------------------|
| 第1図  | 遺跡位置図                   | 第11図 | 井戸板材実測図(1) S E 108               |
| 第2図  | 調査概要図                   | 第12図 | 井戸板材実測図(2) S E 108               |
| 第3図  | 土壌分布・自然地形図              | 第13図 | 遺構実測図(6) S D 1・S D 26<br>S D 113 |
| 第4図  | 遺跡層序図(中央部 南壁<br>西壁)     | 第14図 | 遺構実測図(7) S D 142・畝跡              |
| 第5図  | 遺構配置、埋没河川図              | 第15図 | 遺構実測図(1) 土器実測拓影                  |
| 第6図  | 遺構実測図(1) S B 1 建物跡      | 第16図 | 遺構実測図(2) 土器実測拓影                  |
| 第7図  | 遺構実測図(2) S K 453        | 第17図 | 遺構実測図(3) 土器実測拓影                  |
| 第8図  | 遺構実測図(3) S K 96・S K 128 | 第18図 | 遺構実測図(4) 石製品実測他                  |
| 第9図  | 遺構実測図(4) S K 497        | 第19図 | 遺構実測図(5) 木製品                     |
| 第10図 | 遺構実測図(5) S E 108        | 第20図 | 井戸跡分類図                           |

## 表

- |     |                 |     |              |
|-----|-----------------|-----|--------------|
| 表-1 | 検出遺構一覧          | 表-4 | 遺物観察表(2)     |
| 表-2 | 井戸板材観察表 S E 108 | 表-5 | 庄内地方井戸跡出土例一覧 |
| 表-3 | 遺物観察表(1)        |     |              |

## 図 版

- |      |            |      |                  |
|------|------------|------|------------------|
| 図版 1 | 航空撮影・調査風景  | 図版 5 | 井戸跡検出状況 S E 108  |
| 図版 2 | 掘立柱建物跡 柱穴  | 図版 6 | 出土遺物(1) 土器       |
| 図版 3 | 土壌検出状況     | 図版 7 | 出土遺物(2) 土器       |
| 図版 4 | 溝跡 畝跡等検出状況 | 図版 8 | 出土遺物(3) 木製品・井戸板材 |





## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経緯

酒田市の北部、庄内平野の中央に位置する本楯地区は水稻の盛んなところで、広々とした水田が広がっている。中心にある本楯集落には出羽留守所と云われる県史跡『新田目城』があり、さらに東方2 kmの地点には出羽国府とされる国史跡『城輪柵』が存在する。これらのことから、この一帯は古代には政治経済の拠点的な場所だったことが伺われる。それを裏づけるように周辺からは50カ所を越える遺跡が発見されている。このような地域の歴史の中で、『城輪柵』、『新田目城』に近い向田遺跡は、つながりや結びつきを捉える上でも貴重な遺跡である。近年、庄内では大規模なほ場整備事業等の開発が行われ、遺跡が直接・広範に影響を受けるようになり、遺跡保護が課題となっている。今回の調査も本年度に実施される県営ほ場整備事業（西荒瀬地区）を原因としている。ほ場整備に先だって遺跡の保護や範囲を調べるために、山形県教育委員会は、平成6年秋に遺跡の詳細分布調査を実施した。その結果、向田遺跡の存在が知られ、一部破壊されている部分はあるものの、遺跡面積は約10,000万㎡に及ぶことが分かった。その後、保存や施工方法について協議もたれた。しかし、止むを得ず壊れると判断された部分については記録保存を目的とした緊急調査が計画され、(財)山形県埋蔵文化財センターが主体となって調査実施の運びとなったものである。

### 2 調査の経過

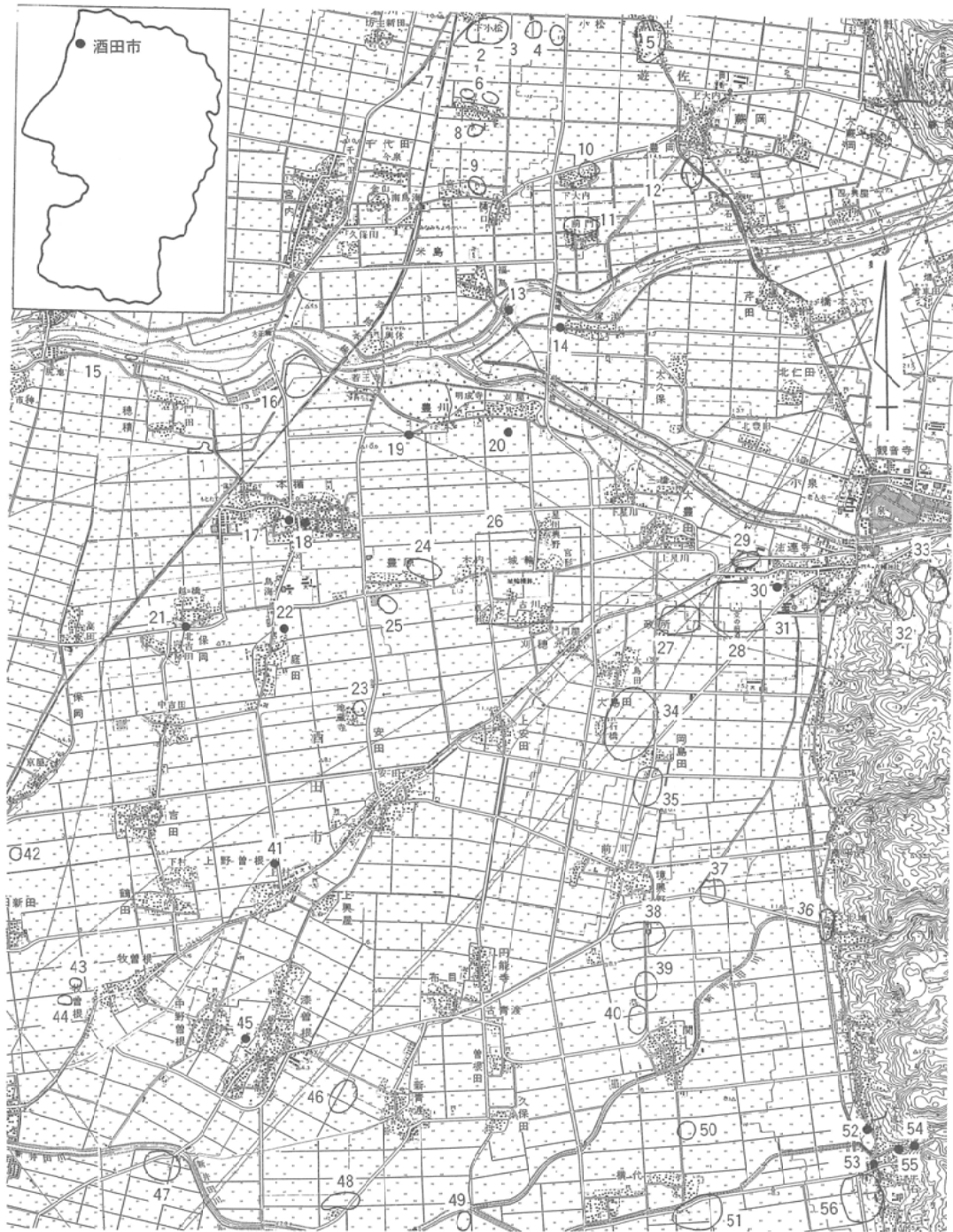
調査は、遺跡域の削平される部分の3,500㎡を対象として実施した。調査区の設定から始めて、表土の除去、面整理、遺構検出他一連の手順を進めた。以下各作業の工程と経過を略記しておく。

平成7年5月8日、発掘器材の搬入と現場事務所の整理を行い、午後に関係者により鉋入式を行った。その後調査区の設定を行い、9日から重機による表土除去を始めた。5月10日から面整理を開始した。17日に調査区に10m×10mのグリッド（方眼区画）を設定し、面整理を継続した。調査区をA～E区に区分し、A区から遺構の検出とマーキングを実施した。

6月1日 遺構検出に並行してマーキングした遺構の平面図（1/100）を作成していった。

6月8日 B区の溝跡から遺構の精査を開始した。併せて精査した遺構の記録と出土遺物の取上げを続けた。6月8日以降、遺構・遺物の精査を続行し、平面・断面図作成、写真など諸記録作業と航空撮影による遺構測量（6月30日）を行った。また一般の方々を対象に、現地での調査説明会（6月29日・参加者110名）を開催した。遺構精査の最後には、河川跡のトレンチ掘りを実施し、地形の堆積状態についても調査した。

7月6日には、井戸跡等一部埋め戻しと調査事務所の撤収を行い、予定通り調査を終了した。午後には土地改良事務所の立会いのもと現地の引き渡しを行った。10月から出土した遺物の整理作業と報告書作成を始めた。



国土地理院発行2万5千分の1地形図「酒田北部」「羽後観音寺」を縮小して使用

0 1km  
(1 : 50,000)

第1図 遺跡位置図

- |            |           |                 |            |            |                |            |
|------------|-----------|-----------------|------------|------------|----------------|------------|
| 1. 向田遺跡    | 2. 前田遺跡   | 3. 地正面遺跡        | 4. 塚田遺跡    | 5. 長田遺跡    | 6. 山道端遺跡       | 7. 水上C遺跡   |
| 8. 水上A遺跡   | 9. 宮下遺跡   | 10. 村前遺跡        | 11. 前門遺跡   | 12. 楯畑遺跡   | 13. 塚刈A遺跡      | 14. 塚刈B遺跡  |
| 15. 門出遺跡   | 16. 若王寺遺跡 | 17. 県指定史跡・新田目城跡 | 18. 新田目A遺跡 | 19. 新田目B遺跡 | 20. 明成寺遺跡      |            |
| 21. 前田遺跡   | 22. 庭田遺跡  | 23. 安田遺跡        | 24. 豊原遺跡   | 25. 豊原B遺跡  | 26. 国指定史跡・城輪柵跡 |            |
| 27. 後田遺跡   | 28. 堂の前遺跡 | 29. 茅針谷地遺跡      | 30. 沼田遺跡   | 31. 樋掛遺跡   | 32. 八森B遺跡      | 33. 八森C遺跡  |
| 34. 沼田遺跡   | 35. 俵田遺跡  | 36. 北境遺跡        | 37. 上ノ田遺跡  | 38. 境興屋遺跡  | 39. 北田遺跡       | 40. 関B遺跡   |
| 41. 上野曾根遺跡 | 42. 中谷地遺跡 | 43. 東割遺跡        | 44. 梵天塚遺跡  | 45. 漆曾根遺跡  | 46. 新青渡遺跡      | 47. 船止遺跡   |
| 48. 南興野遺跡  | 49. 早塚遺跡  | 50. 高阿弥陀遺跡      | 51. 横代遺跡   | 52. 関道遺跡   | 53. 朱口遺跡       | 54. 矢流川A遺跡 |
| 55. 矢流川B遺跡 | 56. 生石2遺跡 |                 |            |            |                |            |

### 3 調査の方法

向田遺跡は面積約10,000㎡あり、東西に長く広がる範囲にある。そのため遺跡の北西に任意に測量基準原点を設定し、座標第3象原の枠組みで調査区域を区分した。東西南北に10mごとに杭を打ち、アラビア数字を番号順に付してグリッド番号とした。

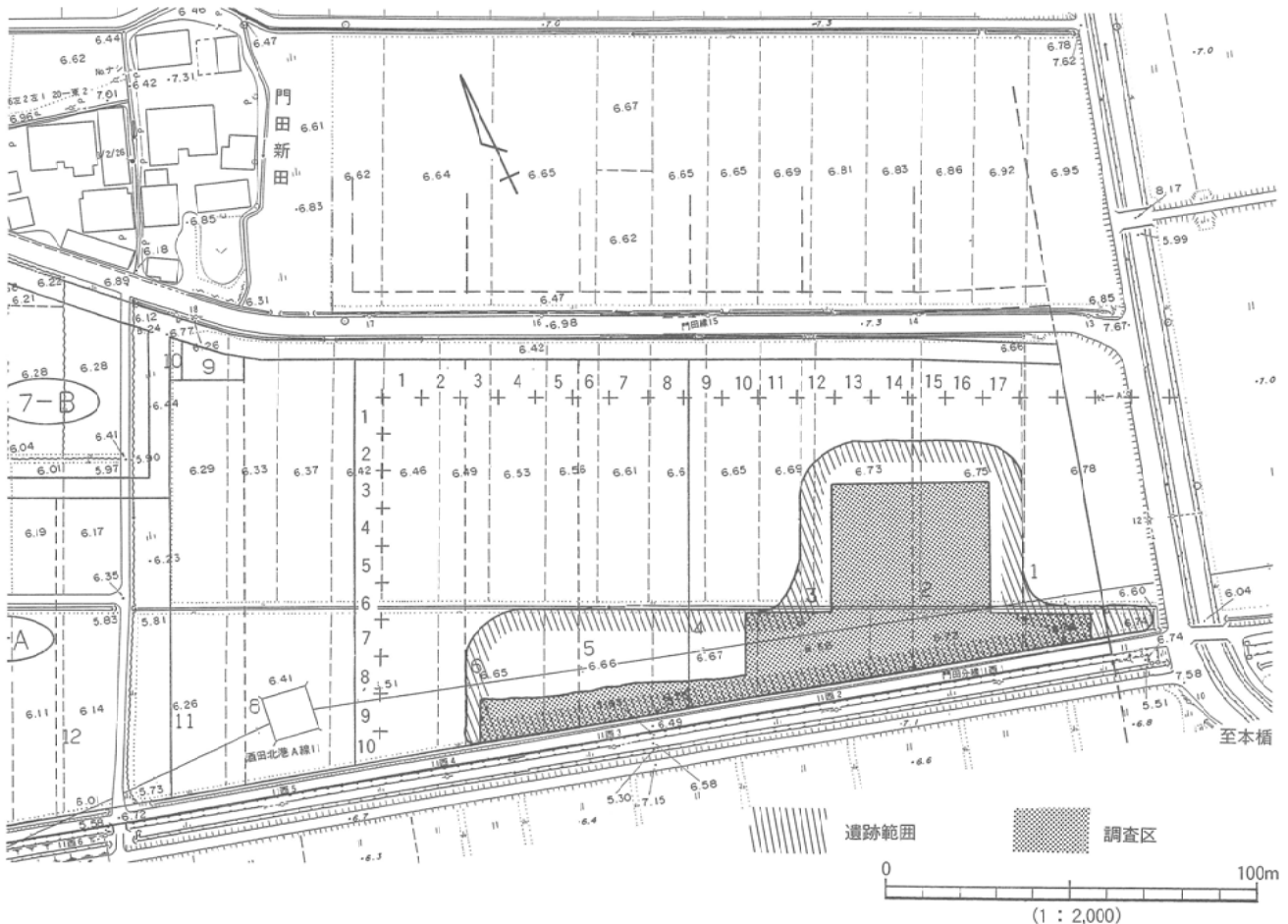
調査区内の標高は、調査区南側のBM1杭、BM2杭（標高7.00m）を基準として標高移動をして、記録作業に利用した。

調査範囲は、東西に不規則に延びるため、東側からA～E区に区分しA区から作業に着手した。

調査区内の遺構については1/10・1/20・1/100の縮尺で平面図・断面図を実測を行った。

写真は、原則として35mmカメラ用のカラーネガとカラーリバーサルフィルムの双方を用いて撮影記録を行った。このほか遺跡全体にわたって空中写真測量を実施した。全体の正確な地形や遺構配置・標高等を記録し、1/100・1/40・1/20の測量図面を作成した。

遺物の取上げはグリッド杭の設置以前は包含層の上下位の層位ごとに区分し、設置後は各グリッドごとに行った。一括遺物・重要遺物については遺物記号を付して地点・レベル等を記録している。一方遺構内からの出土遺物は覆土層位に従って「F1」等の表記で取り上げ、重要なものは遺物記号を付した。検出遺構は、検出順や建物跡等のまとまりを考慮して通し番号をつけ、1/100地図と台帳等に記録した。



第2図 調査概要図

## II 遺跡の立地と環境

### 1 自然環境

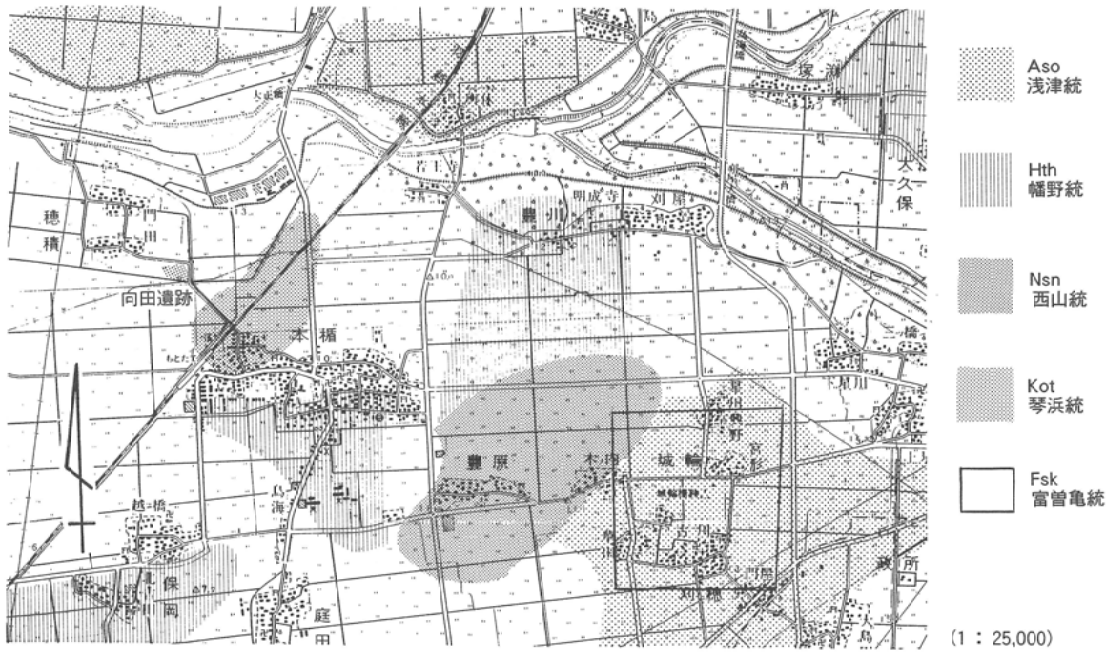
向田遺跡は庄内平野の北部、酒田市街の北東10 km 本楯集落と門田集落の間に存在する。標高は約7 mの河間低地で、荒瀬川・日向川等による小規模の自然堤防と考えられる微高地上にある。現在、日向川は遺跡の北側を西流している。現在、遺跡一帯は、広々としたほ場が広がる水田地帯となっている。

庄内地方は海洋性の気候であり、一日の気温の変化が少ない。しかし、冬季間には季節風（地吹雪）の日数が多くなり、主要道にはところどころに防御フェンスが設置されている。さらに海上からの北西風が卓越すると太陽の日照は10日間に2～3日も射さない。本楯・門田集落にはケヤキなどの屋敷林が多く見られ、防風施設にもなっている。

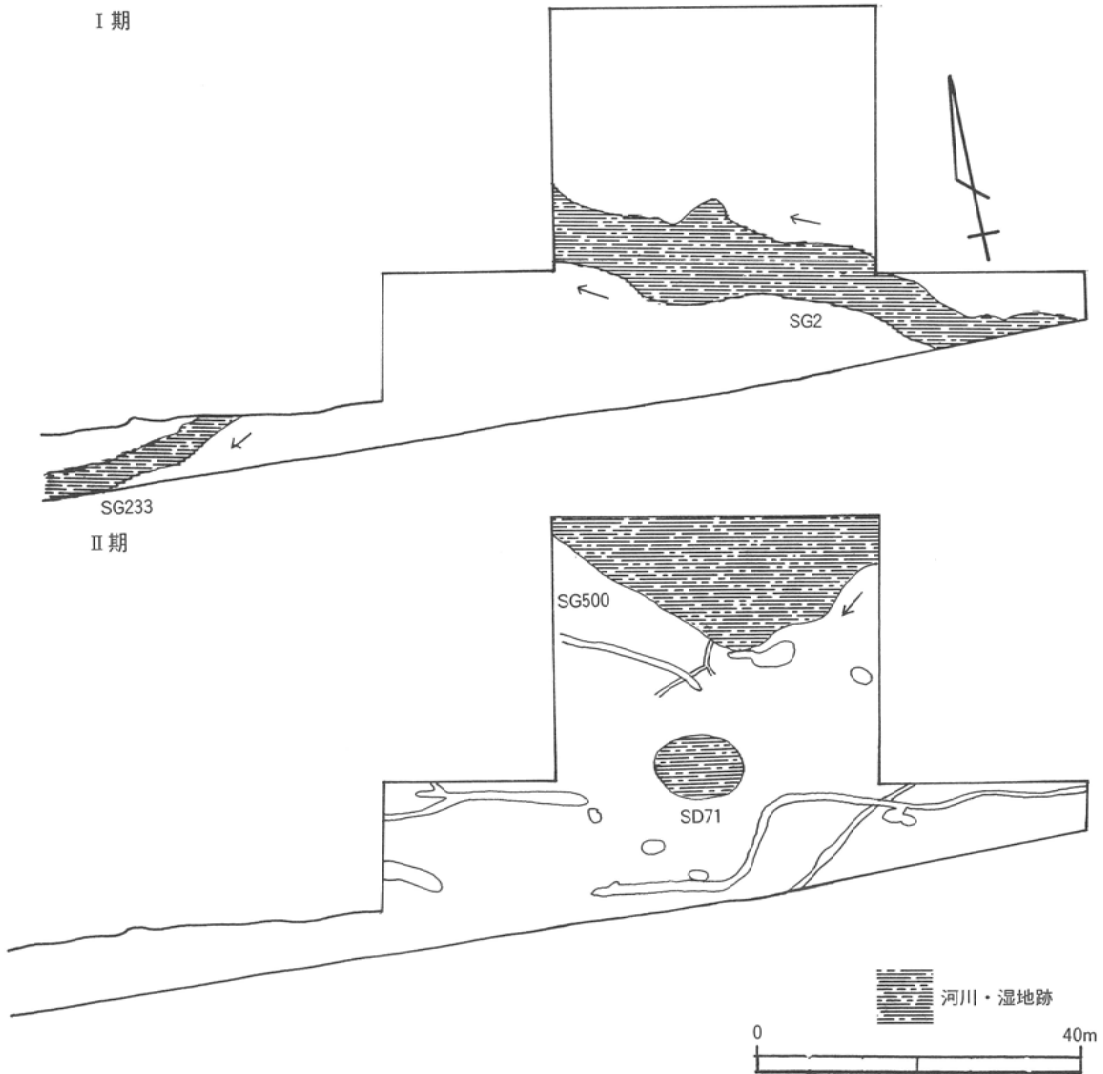
本楯付近は、長い間低湿地であったと思われ、日向川、荒瀬川により緩やかな自然堤防、広い氾濫原を形作っている。酒田周辺の集落は旧河川跡の自然堤防上に立地していることが多く、東西に細長く集落が伸びている。遺跡の立地も同じ傾向を見せている。土壤分類図（1987年『土地分類基本調査』山形県）によれば、酒田市『城輪柵』遺跡周辺の土壤は5種類に区分されている。いずれも水成堆積物によるもので、耕作土の下はグライ化層になっている。旧河川に沿う形で自然堤防が発達し、遺跡の多くはこの上に立地している。向田遺跡は「琴浜統（中粗粒強グライ土壤）」に相当する。この土壤は、非固結堆積岩を母材とし、地下水位が高く全層または耕作土直下よりグライ層となる。土色は青灰色で土性は粗粒質である。地表下50 cmで、埋没した木々が出土することがある。周辺は開墾前は小河川が網の目のように流れていたと考えられ、近世の絵図などでも確かめられる。向田遺跡の調査でも2時期にわたる小河川の跡が確認できた（第3図）。

### 2 歴史的環境

これまでの発掘調査の結果から飽海郡域の遺跡分布を見てみると、縄文時代の遺跡は標高の高い丘陵上を中心に分布している。弥生時代から奈良時代の遺跡数は、かなり少なくなるが平野部の丘陵沿いに分布し、稲作の普及により平野部縁辺に生活の場所が移ったことが伺える。ただ平野部でも縄文時代や弥生時代の遺物が発見されることがあり、新たな視点で検討が求められている。このように時代を経るにしたがい、人々は標高15 mの高い出羽丘陵上から低い平地に生活の場を移してきたことがわかる。平地は平安時代以降に開発が進んだものと推測される。文献資料によると、出羽国は和銅5年（712年）に越後国の出羽郡が昇格したものである。国府機能は出羽柵が果たしていたと考えられているが、現時点では出羽柵に該当する遺跡はまだ確認されていない。いわゆる「征夷」の進展と共に天平5年（733年）になると出羽柵は秋田に移り、天平宝字4年（760年）には秋田城が確認できる。その後、蝦夷との紛争激化により延暦23年（804年）秋田城は廃止され「河辺府」に移されている。延暦年中には「出羽郡井口」に国府が建設されており、仁和3年（887年）になると「旧府高敞之地」に移転した先が八幡町の八森遺跡、国分寺は堂の前遺跡という



向田遺跡周辺土壌分布 (山形県 1986「土地分類基本調査」酒田から)



第3図 土壌分布・自然地形図

説があるが決定的な決め手はまだない。

飽海郡域は平安時代初期に出羽国府が「出羽郡井口地」に秋田より移転した後に本格的に開発が始まったものと考えられている。出羽丘陵に点在する古代の窯跡はほとんどが平安時代に入ってから開かれたものであり、集落遺跡も9世紀以降に形成されたものがかなりの割合を占めている。また9世紀以降、史書に飽海郡域の自然災害の記載が増える。このことは国府の移転により開発が進み、当地域の自然災害への関心が高まったためと言えよう。これらは本格的な開発が平安時代初期であったという傍証になる。

このように律令政府の政策により計画的に配置されたと考える古代集落は官衙との結びつきが非常に強かったものと推測される。しかし官衙遺跡の調査研究は必ずしも進んでいるとは言えず、まだまだ未解決の問題が山積みしている。基本史料となる文献史料に関しては記述内容で問題点も指摘されており、それらを解決する新しい史料の出現も期待できない。唯一残された手段が発掘調査である。個々の遺跡の遺構や遺物の検討から新しい事実や疑問点の解決につながると思われる。その意味でも向田遺跡の調査は重要な位置を占めることは確かで、徐々に人々の生活の様子が見えてくるのではないだろうか。

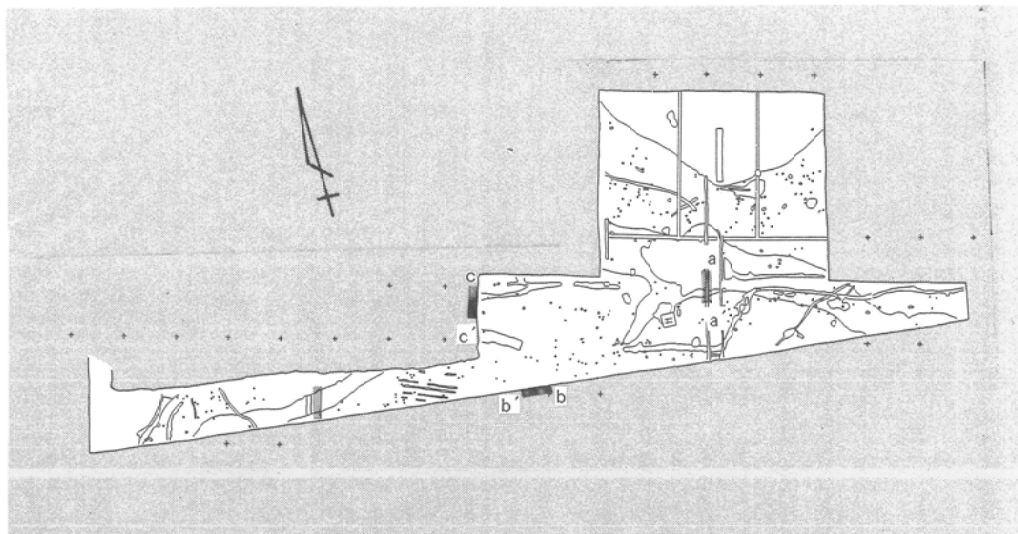
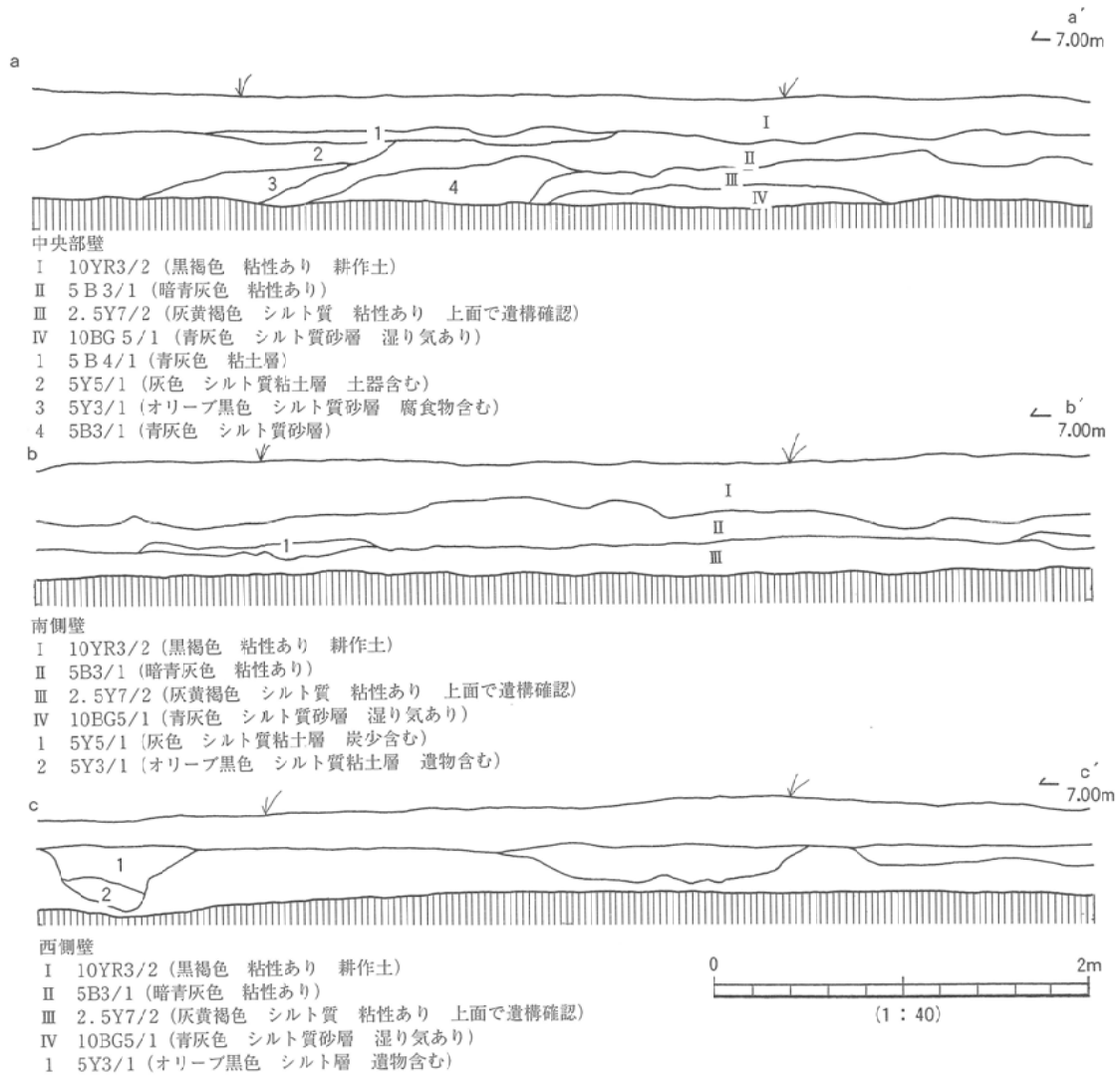
### 3 遺跡の層序

遺跡の位置する場所は、土壌分類によると中粗粒強グライ土に相当し、日向川等による水成堆積による地形になる。調査区一帯は戦後のほ場整備事業等により上層部の大部分は削られて移動している形跡が見られる。

土層は基本的にⅠ層が耕作土、Ⅱ層が暗青灰色の粘土層、Ⅲ層は褐色シルト層となっており、遺構の確認はⅢ層上面にておこなっている。遺物はⅠ、Ⅱ層からも出土しているが耕作による攪乱により移動しているものと考えられる。本来の遺物の包含層はⅡ層とⅢ層の漸移層にある。ところによってⅡ層とⅢ層間に黒色土が入り込んでいるところがある。中世以降の遺構と想定される。また、Ⅲ層上面には牛耕作による足跡痕が多数残されている。層位から中世～近世のころと想定している。

遺跡中央部には古い河川跡が東西に見られるが、堆積土から遺物は検出されなかった。また砂層がレンズ状に堆積している様子が看取された。調査区の北側には、より新しい河川跡、中央部に湿地を形成していたことがわかった。北側の河川跡と湿地は泥炭化の進んだ状況を示している。

向田遺跡では、幾つかの遺構の覆土中から火山灰の堆積を認めることができる。S K 96・S K 453・S E 108・S D 26・S D 71・S D 300等の遺構中には2次的な火山灰堆積の様子が観察できた。これらの遺構の埋没していく過程で堆積していることがわかる。絶対年代や周辺遺跡との関連を探る上で興味深い。類似した火山灰は庄内一円で確認されており、理化学分析では十和田火山起源の降下火山灰と判定されている。しかし、なお問題点も指摘されており詳細にわたって追求していく必要がある。



※ は層序記録位置

0 20m  
(1:800)

第4図 遺跡層序図

### Ⅲ 遺 構

調査によって検出した遺構は総数501基にのぼった。主な遺構としては掘立建物跡・土壙・井戸跡・溝跡・柱跡・小穴・畝跡がある。これらの遺構はⅢ層上面で確認したもので、平安時代から中世にかけてのものともみられ、その他に沼跡や河川跡がある。また、牛による苗代掻きの痕跡も検出できた。以下、分布と個々の特徴について記述する。

#### 1 遺構の分布

検出遺構の配置状況は第5図に示した。調査区の中央を斜めに横断する河川跡を中心として形成される自然堤防上に建物・井戸・土壙・溝跡他の平安時代に属する遺構群が東西に分布していることがわかる。建物跡や土壙は砂地を基本として埋積した河川跡(SG2)よりも後出のものである。ただSG2河川跡も一部(SD71)は湿地として残されていたと考えられる。北側の河川跡(SG500)と西端の河川跡(SG499)は自然堤防の境界部に位置しており、これらの河川跡に囲まれる形で遺構が配置されている。また遺跡は東側と南側に広がる様子が伺えた。

大部分の遺構は自然堤防の高まりを中心に造られており、後世の耕作の影響も受け、部分的に遺構が攪乱されている。

溝跡が22条確認されたが、この中でSD181・SD113・SD142は埋土の状況から中世以降の所産と考える。畝跡とした遺構は5条まとまっており畑の痕跡と考えられる。

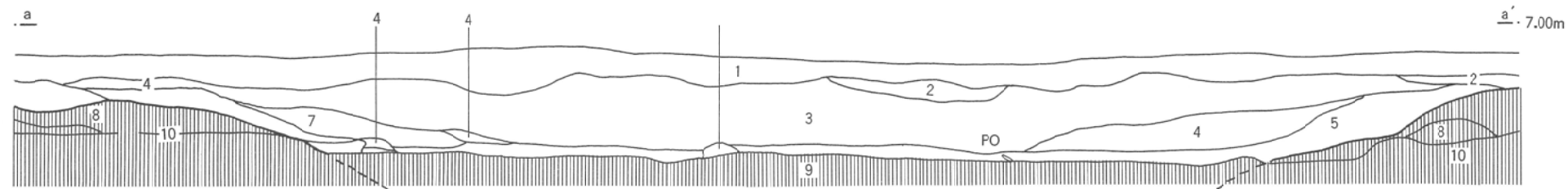
調査区全域から多数の小穴(ピット)が検出されている。径の小さいものがほとんどで稻杭等の跡が多数含んでいるようである。

遺構は、東西そして南側に広がる様子を呈しており、遺跡は東西方向と南方に広がっていくと考えられる。

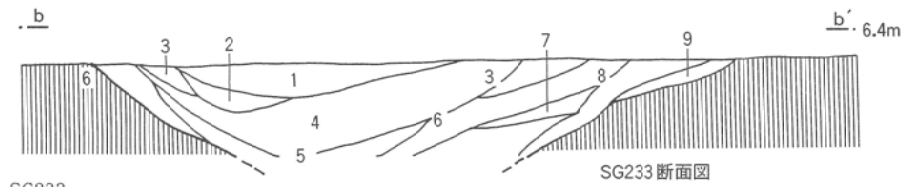
遺 構 の 分 類	グリッド 位 置	出 土 遺 物					火山 灰	備 考
		須恵器	あか やき	内黒	中世	近世		
建物跡 1カ所 SB1 (柱跡8カ所確認)	5-14 6-14	2	2					
土壙 22カ所 SK453 SK96 SK497 SK27 SK32	5-16,17 7,8-14 5-15 7-17 7-17	48 96 12	73 220 91 10	3		1	1	● 遺物多 ● 瓦2点
井戸跡 1カ所 SE108	7-14							● 斎串
溝跡 22カ所 SD1 SD26 SD113 SD142 SD71 SD181 SD264 SD300	7-16 8-13,14 7-111213 6-14,15 7-10,11 9-4 5-14	131 20 86 58 191 2 73	1008 79 178 338 780 6 307	37 5 10 13 7 6 15	1		2	● 湿地跡 ●?
小穴 447カ所								
畝跡 4カ所 SD191 192 SD193 SD194	8,9-9 8,9-9 8,9-9							畑跡?
河川跡 4カ所 SG2 SG233 SG499 SG500	調査区中央部 8-8,9 調査区西端 調査区北側							未確認 石器 縄文土器

表-1 検出遺構一覧

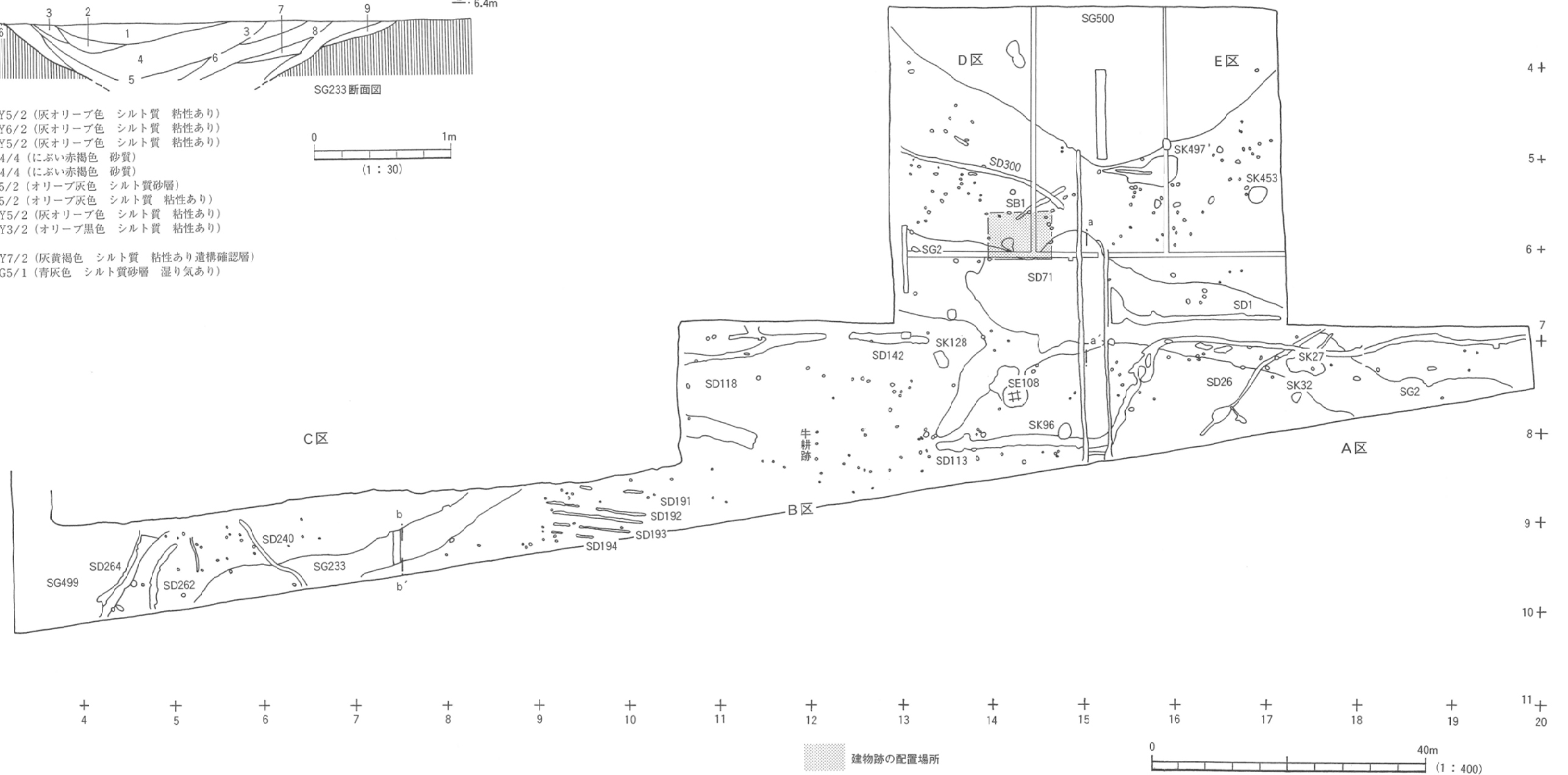




- SD71
- 1 10YR3/2 (黒褐色 粘性あり 耕作土)
  - 2 5B3/1 (暗青灰色 粘性あり)
  - 3 7.5YR4/3 (褐色 粘性あり 土器含む 礫石出土)
  - 4 5Y4/1 (灰色 粘性あり 土器含む)
  - 5 5Y4/1 (灰色 粘性あり 土器含む)
  - 6 7.5YR6/6 (橙色 シルト質 粘性あり 土器含む)
  - 7 2.5Y6/2と10YR4/2ブロック (灰褐色 粘性あり シルト質)
  - 8 5PB4/1 (暗青灰色 シルト砂層)
  - 9 7.5Y5/2 (灰褐色 シルト層 粘性あり 礫石出土 上面に腐食物多い)
  - 10 10BG5/1 (青灰色 砂層)



- SG233
- 1 7.5Y5/2 (灰オリーブ色 シルト質 粘性あり)
  - 2 7.5Y6/2 (灰オリーブ色 シルト質 粘性あり)
  - 3 7.5Y5/2 (灰オリーブ色 シルト質 粘性あり)
  - 4 5YR4/4 (にぶい赤褐色 砂質)
  - 5 5YR4/4 (にぶい赤褐色 砂質)
  - 6 10Y5/2 (オリーブ灰色 シルト質砂層)
  - 7 10Y5/2 (オリーブ灰色 シルト質 粘性あり)
  - 8 7.5Y5/2 (灰オリーブ色 シルト質 粘性あり)
  - 9 7.5Y3/2 (オリーブ黒色 シルト質 粘性あり)
- Ⅲ 2.5Y7/2 (灰黄褐色 シルト質 粘性あり遺構確認層)
- Ⅳ 10BG5/1 (青灰色 シルト質砂層 湿り気あり)



第5図 遺構配置、埋没河川図

2 掘立柱建物跡 (SB1)

建物跡は調査区D地区に位置し、SD71(湿地跡)に隣接する。そのため土色の変化等によって南側の柱跡を確認することができなかった。柱穴の一部は溝跡(SD315)と重なり、切っていることから、これより新しいと考えられる。

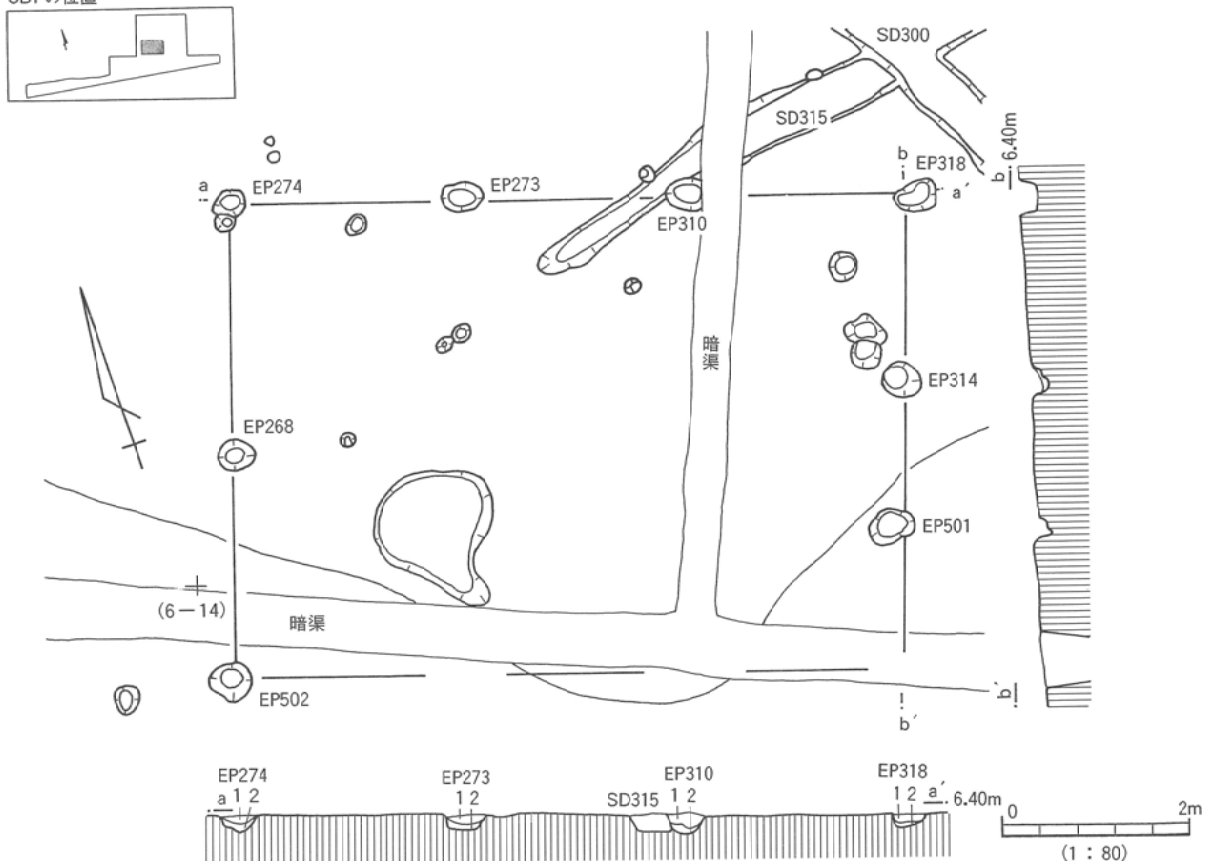
プランは東側柱列が3間、北側柱列は3間、西側柱列は2間分確認された。これらから判断すると桁行き3間(総長7.4m)梁行き2間(総長5.2m)である。西側柱穴間距離は2.64m北側柱穴間距離は2.4mある。建物長軸方向はE-28°-Sである。

柱穴は掘り方が径30cm~40cmの円形、柱痕跡が15~20cmの円形を基調としているが明瞭にわかるものは少ない。堆積層は2層ほどあり、柱穴痕には炭化物・炭片が見られる。遺物は少なく、あかやき土器片が数点出土したにとどまる。

調査区全体から、柱穴と思われるものが447カ所見つかっているが、建物に関わるものとして確認したのはSB1だけである。建物の配置を示すところはなく、径も小さいことから、稻杭等の痕跡が大部分を占めていると考える。

建物跡の確認は1カ所だけであったが、調査区外、東西に存在している可能性が高い。

SB1の位置



EP274	EP273	EP310	EP318
1 7.5Y4/1 (灰色 シルト質 炭あり)	1 7.5Y4/1 (シルト質)	1 7.5Y4/1 (灰色シルト質 炭あり)	1 7.5Y4/1 (灰色 シルト質 炭あり)
2 7.5Y5/2 (灰オリーブ色 シルト質)	2 7.5Y5/2 (シルト質)	2 7.5Y5/2 (灰オリーブ色 シルト質)	2 7.5Y5/2 (灰オリーブ色 シルト質)

第6図 遺構実測図(1)SB1建物跡

### 3 土 壙

土壙（大きく掘り込んだ穴）は22基確認された。最大のものは径320cm、最小は96cmを測る。また、掘り込まれた深さも様々である。土壙内からの遺物の出土数、種類もそれぞれ違う様子を示している。以下、主な土壙について規模や出土遺物堆積状況について、その概略を述べる。

S K 453（第7図）Ⅲ層上面で確認された。土壙全体を検出し、他の遺構との重複はない。平面形はほぼ円形をなす。規模は長軸210cm、短軸180cm、深さが66cmである。堆積土は15層に分けられ、自然堆積層である。第2層には火山灰がレンズ状に堆積している。底面は皿状を呈し、壁の立ち上がりは緩やかである。ここからは総数124点の遺物がまともに出て出土した。いずれも底面近く、壁面に沿う状態で出土した。礫も12点出土した。遺物は土壙の底に投げ捨てられたようであり、復元して完形にいたるものはない。

S K 96（第8図）Ⅲ層上面で確認された。土壙全体を検出し、溝跡（S D 113）と重複している。平面形はほぼ円形をなす。規模は長軸166cm、短軸148cm、深さが46cmである。堆積土は6層に分けられ、自然堆積層である。第3層には火山灰粒が堆積する。底面は皿状を呈し、壁の立ち上がりは緩やかである。ここからは129点の遺物が出土した。遺物は覆土中（F 2、3）から出土した。礫も2点出土した。なお、底面より埋没した自然木を確認した。土壙南側に延びて埋まっているようである。

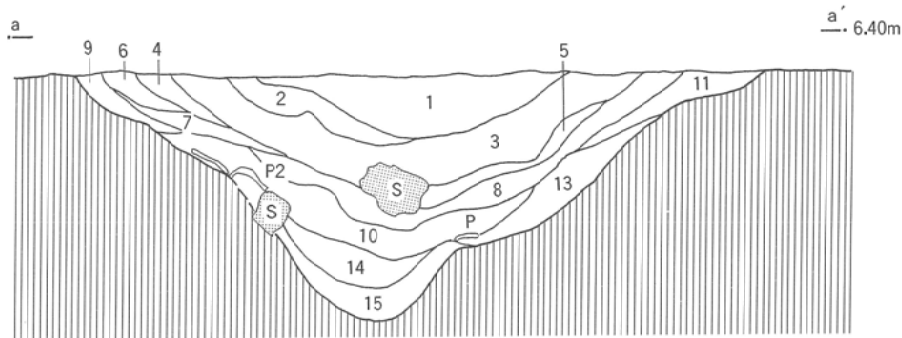
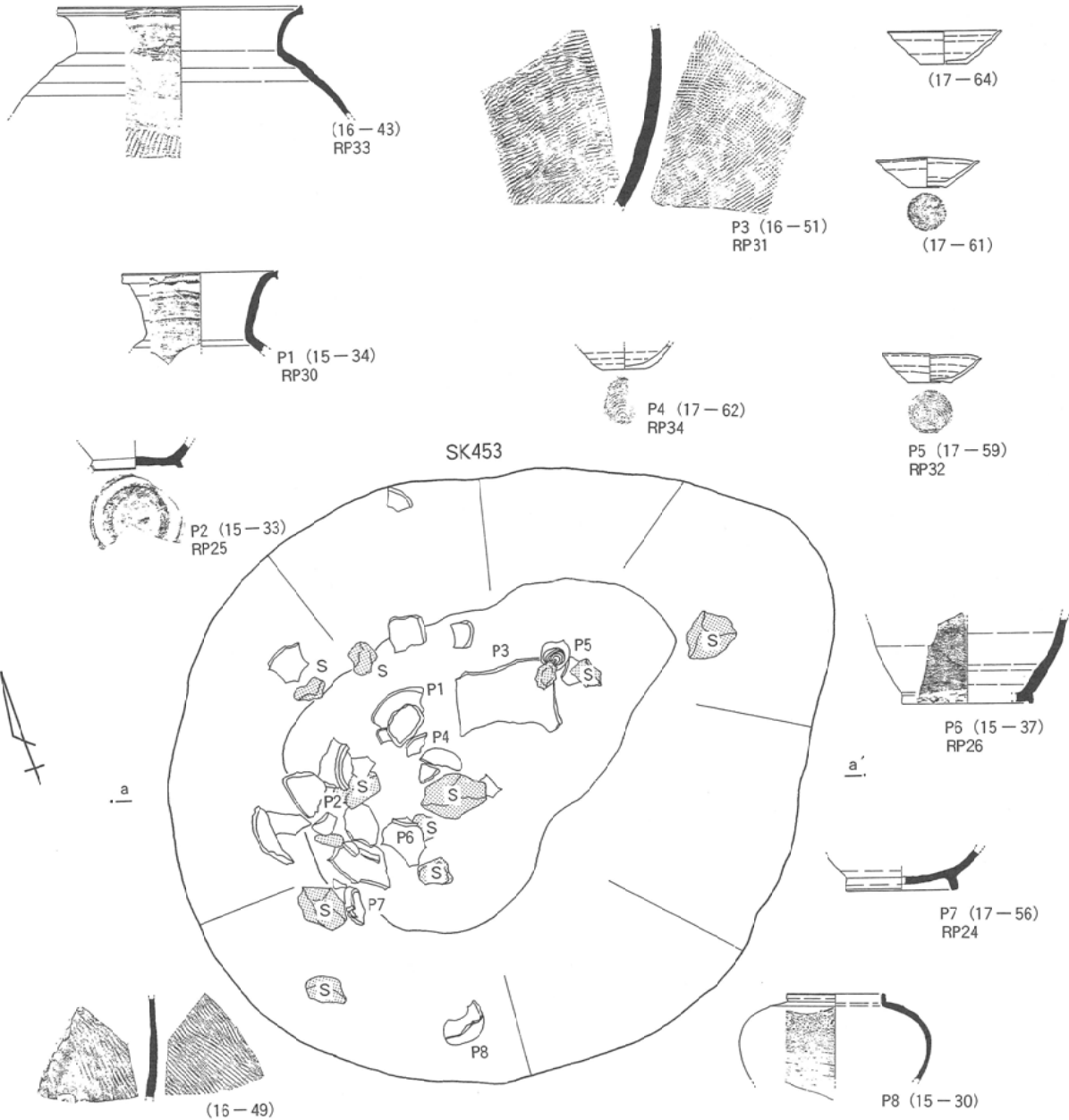
S K 128（第8図）B区北側、S D 142のそばに位置する。平面形は方形をなす。長軸100cm、短軸54cm、深さ15cmを測る。断面は『U』字形に近い。堆積土は2層あり、人為堆積土と思われる。土色から中世以降の遺構と考えられる。堆積土中からは、礫2点と木製品1点出土した。

S K 497（第9図）調査区の北側中央部、5-16グリッドに位置する。平面形は不整楕円形をなし長軸は320cm短軸は128cmを測る。深さは13cmあり、2層の堆積土が見られた。2層ともに自然堆積層と考えられる。中央部に幅25cm長さ510cmの木材が出土したが、腐食が激しく形態を把握するにとどまった。堆積層からは須恵器片96点・あかやき土器片220点・中世陶磁器片2点と瓦片2点が出土した。

S K 27 A区中央、S D 1に沿って位置する。S D 1によって切られており、溝が掘り込まれる以前の所産と考えられる。深さは15cmと浅く、堆積層も2層で砂が多い。須恵器10点・あかやき土器40点出土している。土器片はいずれも細片である。

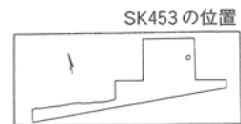
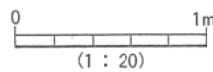
S K 32 S K 27の南側に位置する。長軸104cm、深さは24cmを測る。あかやき土器が10点出土している。

S K 56 S D 1に近接する。長径120cm、深さ20cmを測る。堆積層は1層で赤褐色の酸化鉄の砂が多量含まれている。須恵器片2点、あかやき土器片11点が出土している。

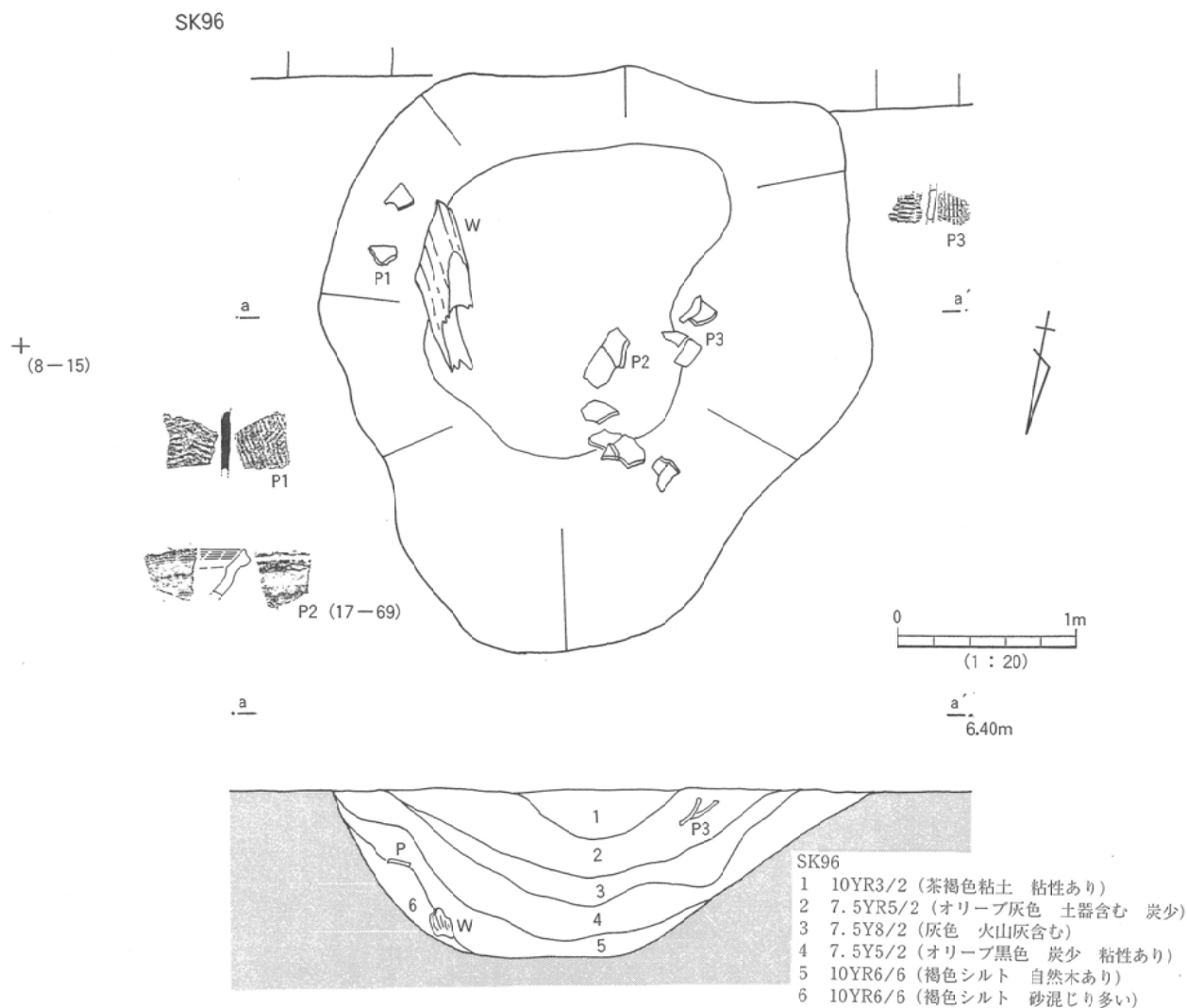


SK453

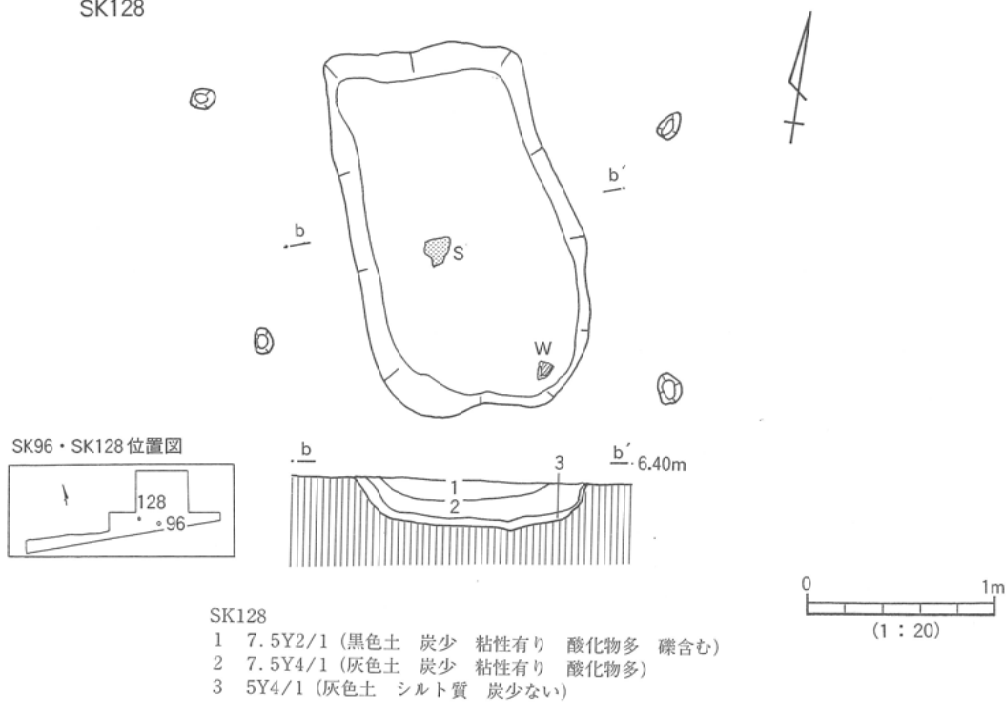
- 1 7.5Y3/2 (茶褐色シルト 炭少 粘性あり)
- 2 10YR7/4 (黄褐色 炭少 粘性あり 火山灰が入る)
- 3 7.5Y3/2 (茶褐色 炭少 礫含む)
- 4 7.5Y4/1 (灰色 炭少)
- 5 7.5Y3/2 (オリーブ黒色 酸化物 粘性あり)
- 6 10Y4/2 (オリーブ灰色 炭少 粘性あり)
- 7 7.5Y4/1 (灰色 粘性あり)
- 8 7.5Y4/3 (暗オリーブ色 土器含む 酸化物 粘性あり)
- 9 10YR6/6 (褐色シルト F1ブロックで入る 粘性あり)
- 10 7.5Y5/1 (灰色 土器含む 炭あり 粘性あり 繊維物あり)
- 11 7.5Y5/1 (F9と同じ)
- 12 10YR6/6 (褐色シルト)
- 13 5Y6/3 (オリーブ黄色 炭あり 粘性あり 繊維物あり)
- 14 7.5Y3/1 (オリーブ黒色 泥炭化 水分含む)
- 15 7.5Y3/2 (オリーブ黒色 泥炭化 水分含む)



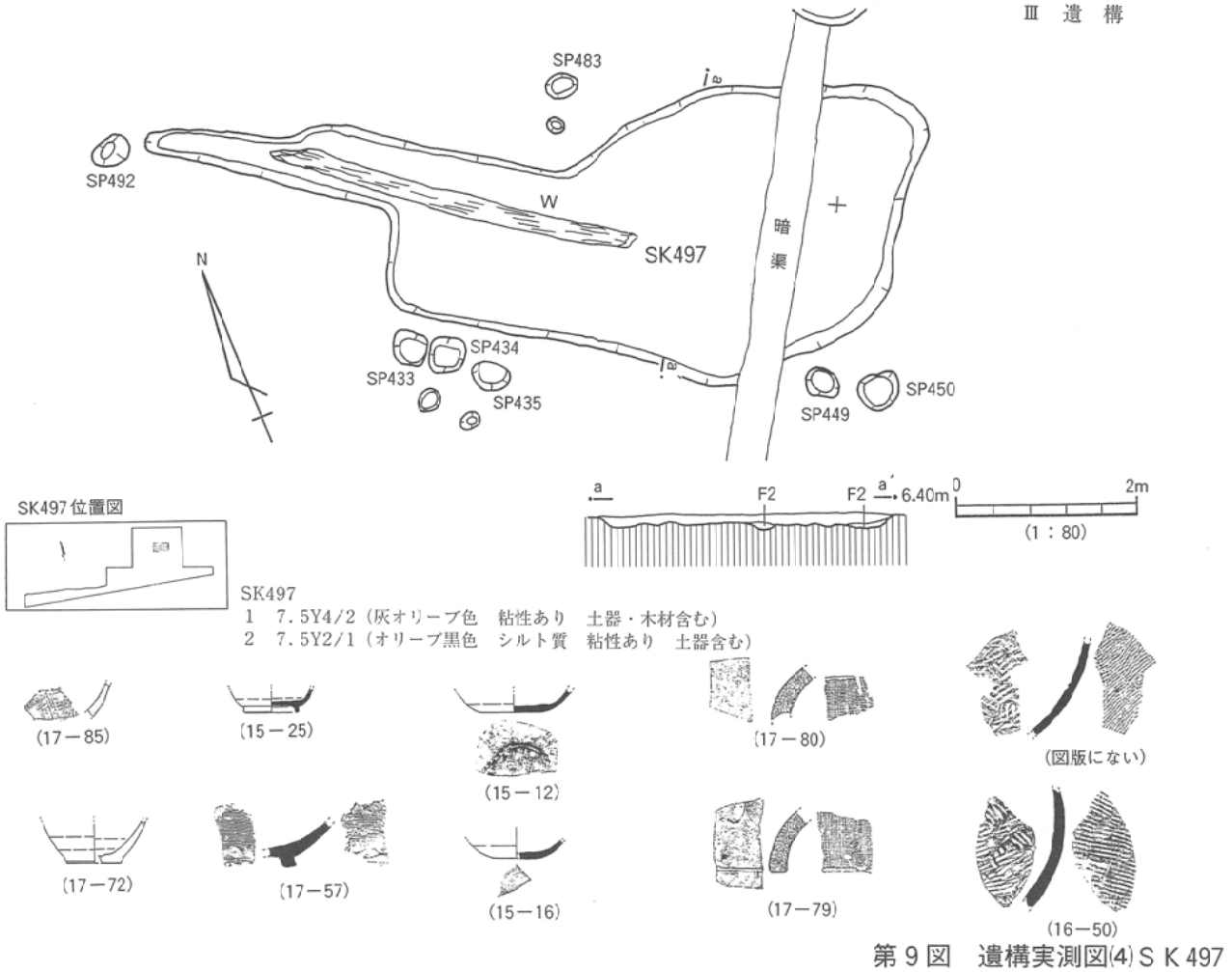
第7図 遺構実測図(3)SK453



SK128



第8図 遺構実測図(3)SK96・SK128



#### 4 井戸跡 (第10図)

井戸跡 (S E 108) はB区の東側に位置している。遺構検出面はⅢ層上面である。S D 71と北側で切り合い関係にある。遺存状況は井戸枠の一部を除いて良好である。確認できた建物跡 (S B 1) とは直線距離にして15mほどある。

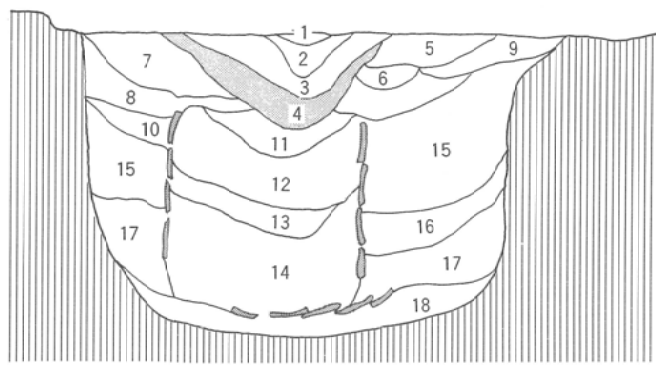
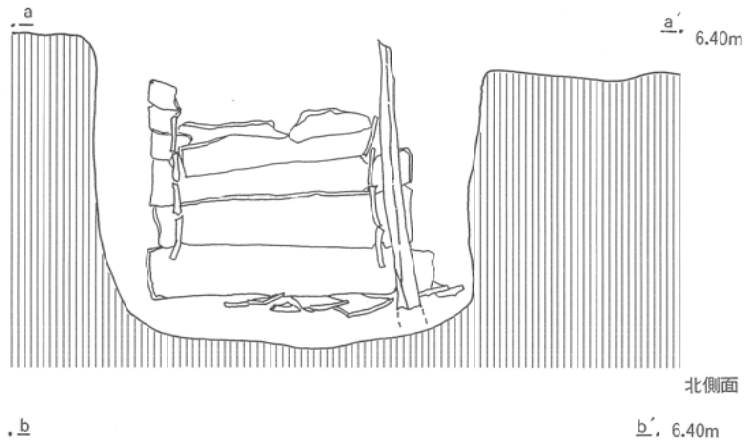
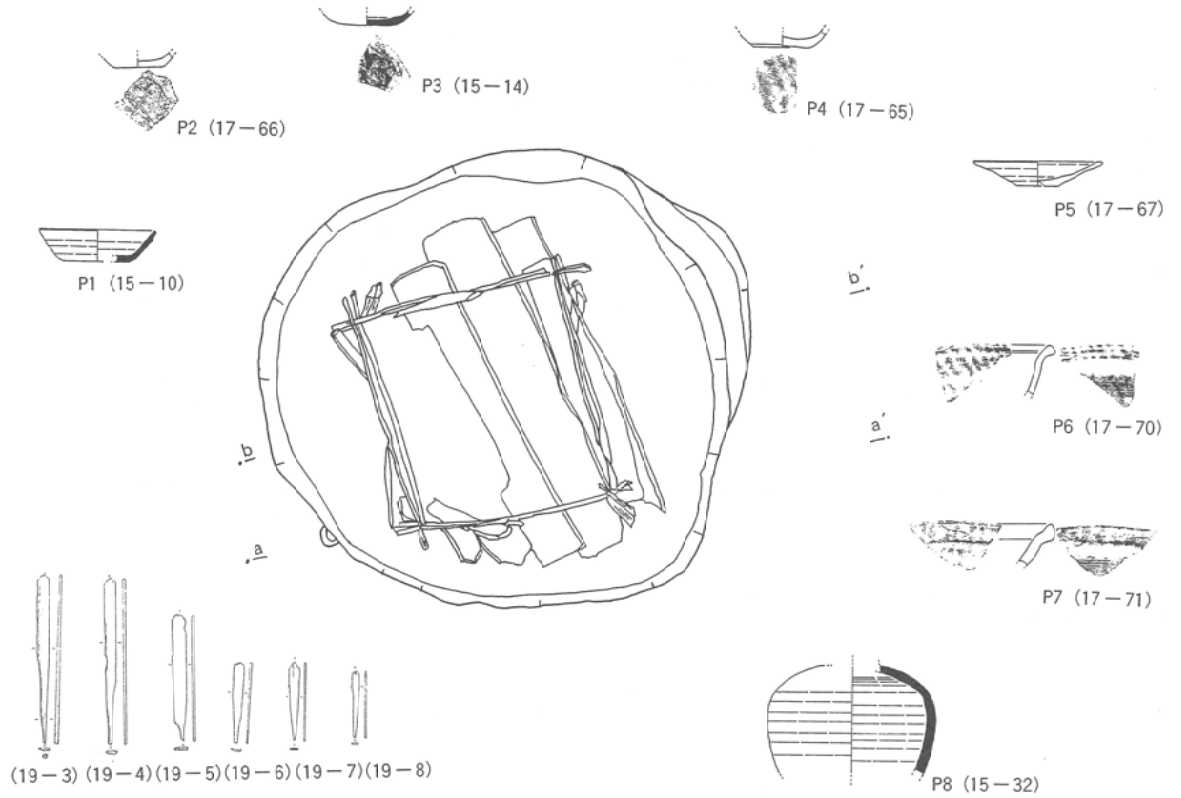
井戸跡は掘り方と中央に据えられた方形の井戸枠からなっている。

掘り方は平面形が長軸241cm、短軸205cmの円形を呈している。周壁の立ち上がりはほとんど垂直となっている。底面は検出面より130cmの深さであるが井戸枠の周囲はさらに20cm程に掘り込まれており、水溜めの用途に用いたものと考えられる。

井戸枠は掘り方の中央で周壁よりも約50cm内側に設置されている。平面形は一辺が1.2mの方形である。主軸方位はN-16°-Eとなる。遺構検出面から隅柱が確認できたことから上端から下端まで1.2mはあったと考えられる。井戸枠は6段組んだ状況が確認できたが、堆積土中から崩壊し腐れかかっている板材が出土していることから6段以上に組んでいたものと考えられる。

井戸掘り方部分の埋土は4枚の堆積層が認められる。人為的に埋められたため、褐色シルトと粘土ブロックなどが混じっている。F 4層は乳白色火山灰層で流れ込みによる2次的な堆積層である。F 17層からは湧水がみられ、泥炭質シルト層になっている。井戸跡からは、斎串6点と箸10点と須恵器の坏・壺、あかやき土器の坏・甕の破片が出土した。井戸枠はいずれも『スギ』材を利用している。加工痕等があり建築部材転用の可能性が高い。

III 遺構



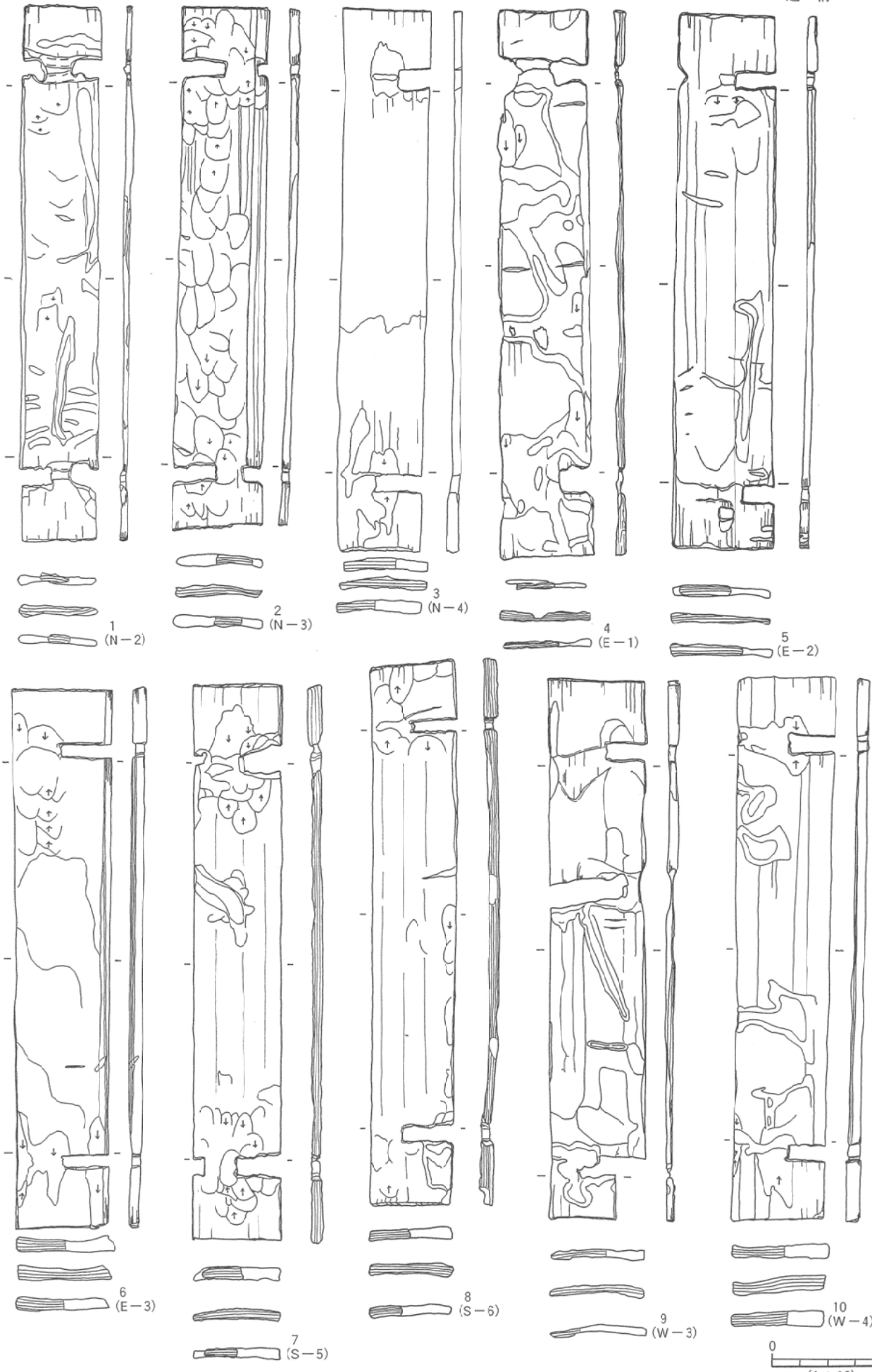
SE108

- 1 5G2/1 (褐色粘土ブロック含む 炭あり 粘性あり)
- 2 10G2/1 (黒色土 炭あり)
- 3 7.5Y4/1 (茶褐色シルト 粘性あり 酸化物多い)
- 4 7.5Y8/2 (灰白色 火山灰の流れ込み)
- 5 7.5Y4/1 (灰色 炭あり 土器含む)
- 6 7.5YR8/4 (浅黄褐色 褐色粘土のブロックあり)
- 7 7.5Y5/2 (暗灰黄色 炭あり 粘性あり 酸化物含む)
- 8 7.5Y4/1 (灰色 炭あり 粘性あり 土器含む)

- 9 7.5Y5/2 (灰オリーブ色 褐色粘土ブロック入る 粘性あり)
- 10 7.5Y5/1 (灰色 粘性あり 酸化物含む)
- 11 10GY4/1 (灰色 粘性強い 泥状 土器出土)
- 12 10GY4/1 (灰色 粘性強い 泥状 木製品出土)
- 13 10GY3/1 (暗灰色 泥炭質 泥状 木製品出土)
- 14 10GY3/1 (暗灰色 泥炭質 泥状)
- 15 10GY4/1 (灰色 泥状)
- 16 7.5GY4/1 (緑灰色 泥状 砂含む)
- 17 7.5GY4/1 (緑灰色 砂含む)
- 18 7.5GY4/1 (緑灰色 青砂多い)



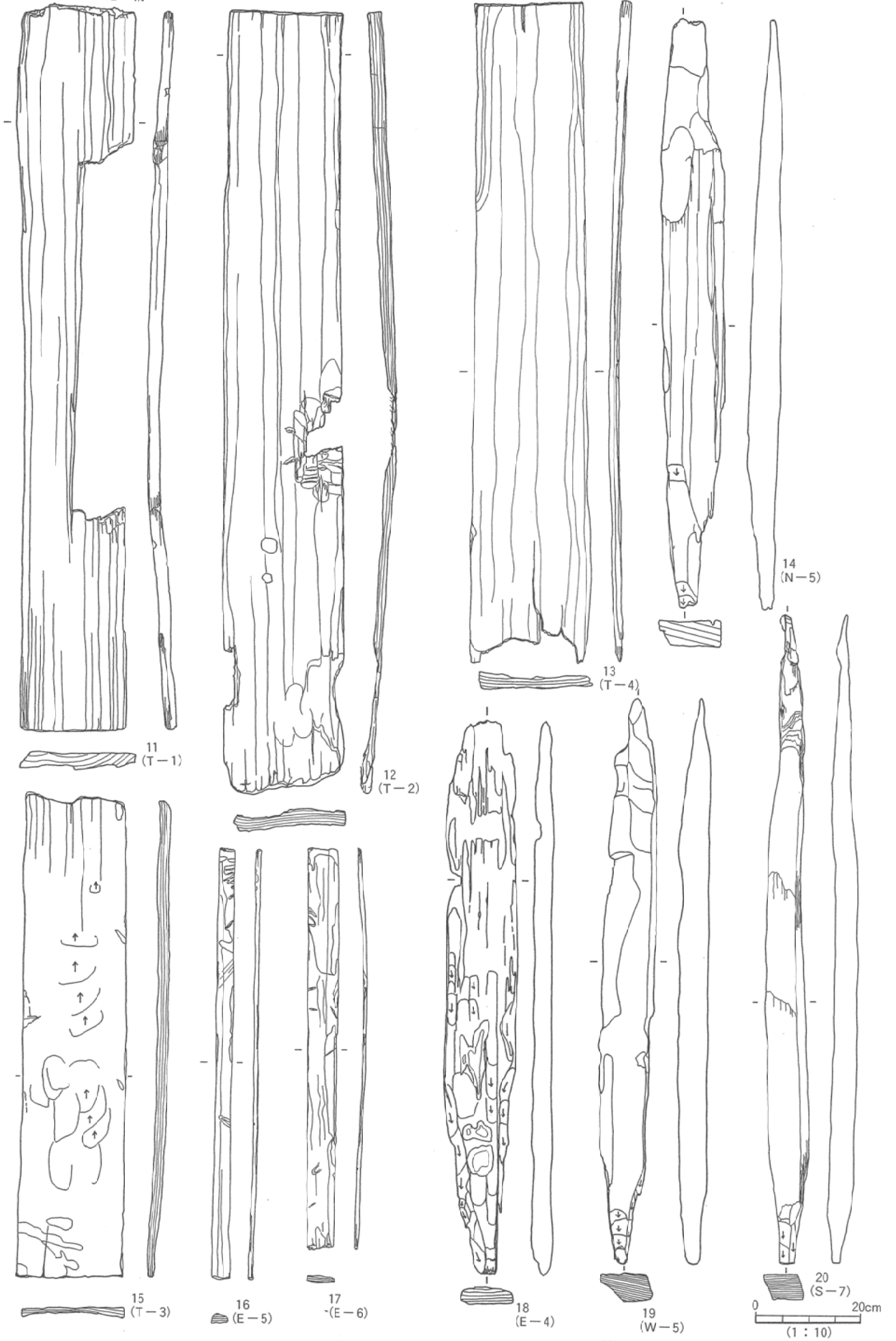
第10図 遺構実測図(3) S E 108



第11図 井戸板材実測図(1)SE108



III 遺構



第12図 井戸板材実測図(2)SE108

Ⅲ 遺構

遺物番号	種別	井戸内の位置	計測値 mm				調整			備考
			最大長	最大幅	厚さ	内寸	表面	切断部	溝部	
1	井戸枠	N-2	999	143	25	715	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	両側辺に溝
2	井戸枠	N-3	977	170	28	730	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	両側辺に溝
3	井戸枠	N-4	1,100	164	22	721	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	片側に溝
4	井戸枠	E-1	1,073	172	21	716	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕のみ?	片側に溝
5	井戸枠	E-2	990	188	22	740	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	片側に溝 穿孔あり
6	井戸枠	E-3	1,000	185	27	740	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	片側に溝
7	井戸枠	S-5	1,031	167	28	716	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	両側辺に溝
8	井戸枠	S-6	1,008	163	25	733	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	片側に溝
9	井戸枠	W-3	1,002	180	21	730	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	中央部に大きな切り込み
10	井戸枠	W-4	1,000	178	25	722	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	片側に溝
11	底板	T-1	1,395	225	30		手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	中央部片側に溝
12	底板	T-2	1,503	232	30		手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	中央部片側に溝
13	底板	T-4	1,262	230	32		手斧 鉋	ノコ痕		
14	隅柱	N-5	1,134	110	51		手斧 鉋	ノコ痕		先端部手斧ケズリ
15	底板	T-3	927	204	22		手斧 鉋	ノコ痕		
16	補強材	E-5	826	22	12		手斧 鉋	ノコ痕 折れ		両面に細いキズ
17	補強材	E-6	769	60	8		手斧 鉋	ノコ痕 なた?		両面に細いキズ
18	隅柱	E-4	1,070	131	34		手斧 鉋	ノコ痕		先端部手斧ケズリ 基部欠
19	隅柱	W-5	1,083	100	53		手斧 鉋	?		先端部手斧ケズリ
20	隅柱	S-7	1,237	75	44		手斧 鉋	ノコ痕		先端部手斧ケズリ

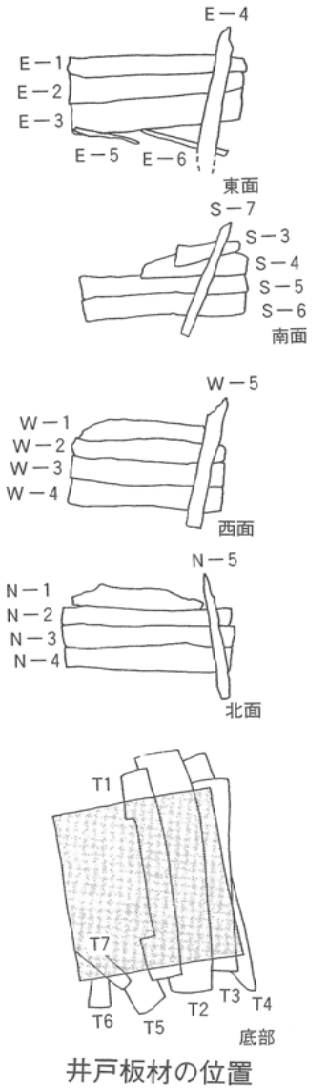


表-2 井戸板材観察表 S E 108

5 溝跡 (第13図)

溝跡として記録したものは22条ある。幅や長さ・堆積層・出土遺物など違いが認められる。個々の位置や形態については遺構配置図を参照されたい。主な溝跡について図示し、以下説明する。

SD1 調査区東側から西にむかって伸びている。幅約80cmほどで途中で曲がりながら、B区まで伸びる。SD25、SD26を切っている。Ⅲ層上面で確認した。深さは所々で変化があり、SD26と切り合うところでは24cmを測る。堆積土は自然堆積層で、この中に土器の細片を含む。酸化鉄を多量に含み、SG2河川跡の覆土が流れ込んだと思われる。断面は逆台形に近い。あかやき土器の小片が出土した。

SD71 Ⅱ層中位で存在がわかり、Ⅲ層上面で範囲や規模が確認できた。SG2河川跡の一部に相当し、深まりの部分が湿地のように残ったものである。東西130cm、南北110cmを測る。底は緩やかに傾斜し、レンズ状になっている。下層は泥炭質で繊維質を多量に含む土壌になっている。堆積土中から須恵器片191点・あかやき土器片780点・板状の木製品1点(第19図1)・砥石(第18図9)が出土している。

SD26 A区を北東から南西にむけて掘り込まれている。SD1と切り合い、堆積土や切り合い方からSD26の方が古い遺構であることがわかる。幅35cm、深さ33cmを測り、堆積土は2層確かめられ、炭片を含む。須恵器片20点・あかやき土器片79点出土した。

S D 113 井戸跡の南側、一部S K 96と切り合う。堆積土からS D 113が新しいことがわかる。幅は約105cmで浅い。底面は小さい凹凸が激しく見られ。牛の足跡と考えられる。須恵器86点、あかやき土器片178点、内黒土器片10点出土した。

S D 142 B区の北側、Ⅲ層中で確認した。幅は最大で140cm、深さは最大で24cmを測る。堆積土は2層に分けられ、黒褐色土層(F 1)から須恵器片58点・あかやき土器片338点と古銭『咸元通寶』が出土した。東側はS D 71に続くと思われる。

S D 300 D区、建物跡(S B 1)の北側に位置する。幅30cm確認面からの深さは30cmを測る。2層の堆積層があり、炭くずやあかやき土器の小片が多数出土した。湿地跡(S D 71)に続く。直接、建物跡との関係はつかめなかった。溝跡はさらに西側(調査区外)に伸びている。

## 6 畝状遺構

C地区東側に5条の畝状遺構を検出した(S D 191・S D 192・S D 193・S D 194・S D 195)。Ⅲ層上位の面で確認でき、さらに南北に続くようである。付近の小穴群(S P 200~220)と一部重複しており小穴群よりも古い。5条の畝跡は、東西方向(N-70°-E)に50cm間隔で規則的に配列しており、ひとつのまとまりをなしている。長さは多様ではほぼ全長の明らかな例で5.5m、幅は20cmである。断面はいずれも『U』字形であり、底面にはくぼみが多数見られる。堆積層は3層で堆積土からは須恵器片2点、あかやき土器片22点出土している。小片のため図示はできなかった。この種の溝跡は、畑に関わる畝跡と考えられている。

## 7 河川跡

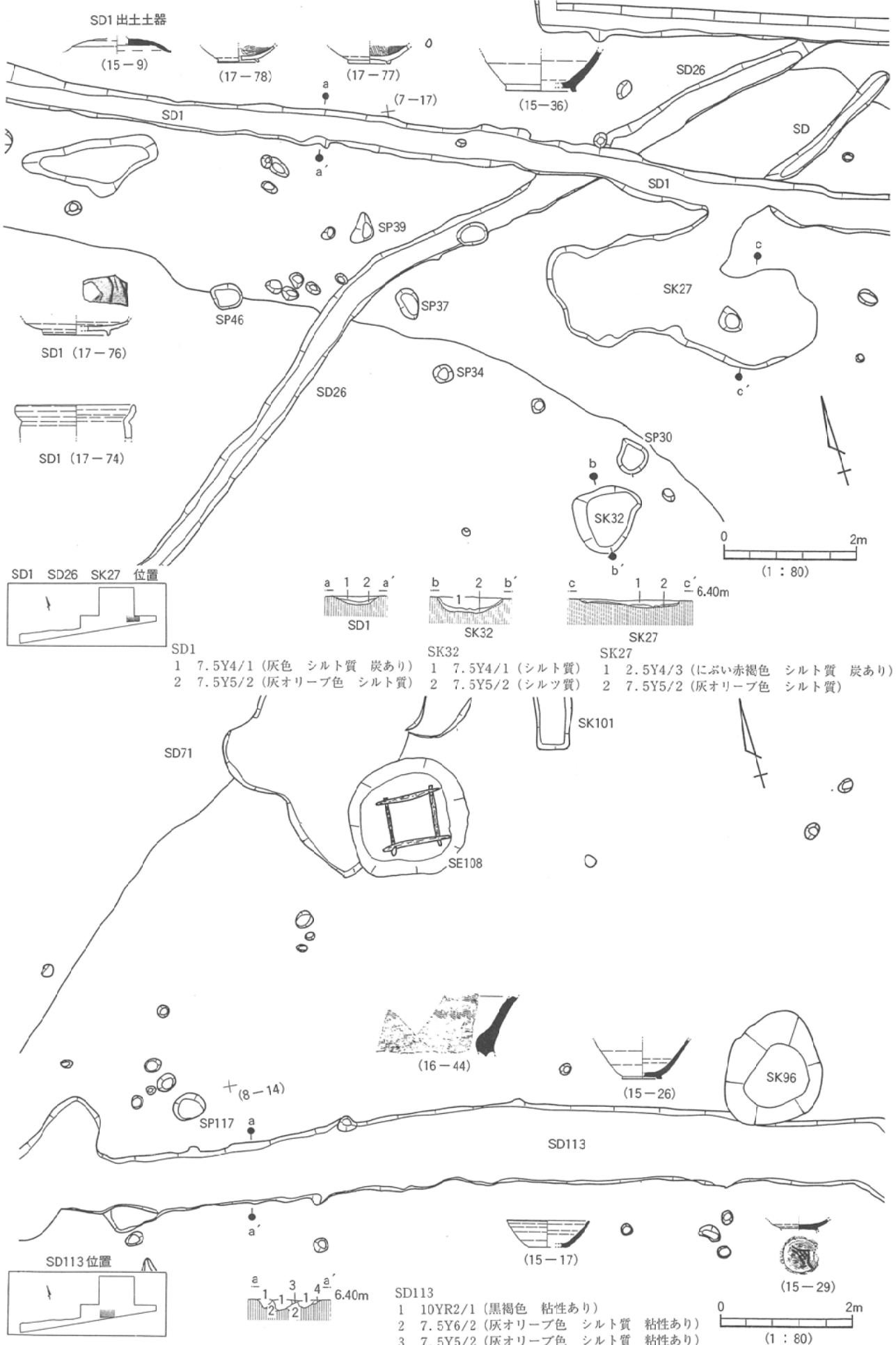
調査区北側と中央部、西端において河川跡とみられる落ち込みおよび堆積土が確認された。

S G 2 中央部を東西に流れたことが堆積土等により確認される。鉄分の多く含む赤褐色砂層が河跡を埋め立てるように堆積しており、断面観察では7層まで確認できた。堆積土中からは遺物の出土はなかった。遺構の多くは、この河川跡を切っている。S D 71はS G 2河川跡の広く深く埋まりきらなかったところになっている。

S G 233 上層は褐色のシルト層であるが、途中から砂層になりレンズ状に堆積している。標高5.8mのラインになると湧水してくる。遺物は出土しない。

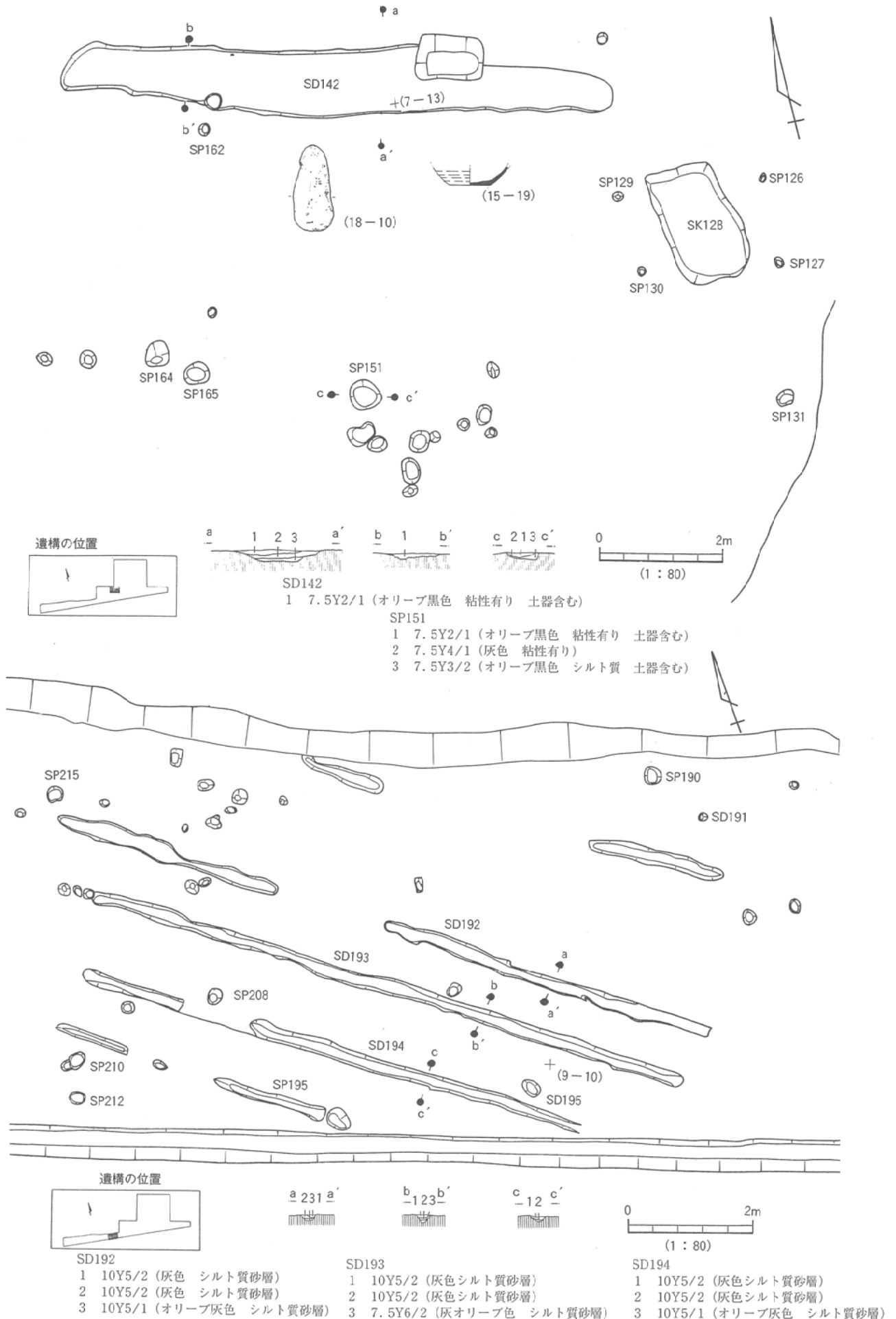
S G 499 遺跡の西端に位置する。Ⅱ層下で確認できた。堆積層上位は黒褐色の腐食土になっており、植物繊維が含まれている。下層は漸移層をはさんで、グライ化した砂層になっている。腐食土層からは、平安時代~近世の土器片等が出土した。大部分は小破片で摩滅しており、流されたものが多いと思われた。

S G 500 調査区の北側で確認した。遺跡の北側に東西に広がると思われる。黒褐色の腐食土、牛耕作跡の下は青灰色のグライ化した砂層が続く。自然堤防の縁の部分に相当する。黒褐色の腐食土層中から土器の小片が4,801点出土した。また縄文時代の石鏃も2点出土している。土器片はまとまりとしては分布しておらず、投げ捨てられてから流されていると考えられる。



第13図 遺構実測図(6)SD1・SD26他

III 遺構



## IV 遺物

今回の調査で出土した遺物には土器・土製品・石器・石製品・木製品などがある。またその他に牛の歯骨・植物遺体（くるみ等）なども出土した。遺物は総数28,718点を数えた。主な遺構ごとの遺物出土点数は表-1に記したが、全体の約40%は遺構確認までの段階での出土遺物である。遺構内では土壙(S K 96、453、497)、溝跡(S D 1、142) 河川跡(S G 500)からの出土数が多かった。以下、遺物を種類ごとに取り上げ、その特徴をまとめる。

### 1 土 器

向田遺跡からは小片が多いものの、整理箱にして22箱の土器類が出土している。大半は平安時代の土器であるが、一部中世や近世の陶磁器も出土している。以下、土師器・須恵器・あかやき土器・中世・近世陶磁器などについて順に説明する。

#### (1) 土師器

出土した土師器は形態から坏と高台付坏に分けられる。全て器内に黒色処理した内黒土器である。

- a) 坏 2点出土した(図版17-61、62)。2点ともに回転糸きり技法により底部切離しが行われており、内面黒色処理されているが摩滅してミガキ痕が確認できない。前者は底部に比して口径が大きく、後者はロクロ痕が明瞭に残り底部もヘラ削り調整を受けている。
- b) 高台付坏 2点出土している(図版17-77、78)。いずれも底部は回転糸きり技法により切り離され、内面黒色処理を受け、ミガキ痕が残る。77の資料には加熱による火ハネ痕が見られる。

#### (2) 須恵器

比較的遺存状態が良いため、図示できた点数が多かった。形態から坏・高台付坏・高台付皿・小壺・壺・甕に分類できる。

- a) 蓋(図版15-1~9) 全て破片資料で、ロクロ調整を受けている。形態的に断面の平坦なもの(1~6、8、9)と傾斜のあるもの(7)に二分できる。つまみの形態も中央部分が凸状と凹状のものが見られる。
- b) 坏(第15図10~22、第17図60) 底部切離しの「回転糸きり」と「ヘラ切り」によって分けられ、いずれも50%づつ同じ割合である。いずれもロクロ痕が明瞭に残っている。中には墨書土器が5点確認したが、文字として判読できたのは15の『生』のみである。
- c) 高台付坏(第15図23~26、29) 完全なものはなく、底部の破片資料のみである。底辺部から口縁にかけて急に立ち上がるもので底部ヘラ切りのもの(23~25)と底部が小さく斜めに立ち上がるもののもので回転糸きりのもの(26、29)の2種類見られる。29の底部には墨痕があり、『全』と判読できる。
- d) 高台付皿(第15図27、28) いずれも台部は高く、底部は回転糸切りによって切り離されている。28は焼成時に火膨れが発生し、底部が変形している。
- e) 壺(第15図30~40) 破片資料がほとんどで全体まで復元できるものはない。口縁部を

見ると短径広口のもの(30)と長径狭口(31)長径広口(34)のものがある。底部はすべて貼付高台で40以外はヘラ切りによる切り離しになっている。

f) 甕(第16図41~55) 全体の形状を推定する資料がなく、形態など不明である。底部の破片などから丸底で器面にはタタキ痕とアテ痕による調整が見られる。

### (3) あかやき土器

形態から坏・甕・埴に分類できる。

a) 坏(第17図58、59、63、64、65、66) 底部切離しは回転糸切り技法により、底径は小さく直接的に外反する。66の資料底部には『X』字状の線刻が見られる。

b) 皿(第17図67) 緩やかに立ち上がり口縁が大きく広がる。底部は回転糸切りである。

c) 埴(第17図68~71) 口縁部4点図示した。口縁が直立するもの(68、71)と外反気味になるもの(69、70)の2種類見られる。

d) 甕(第17図71~75) 底部(72)と口縁部(73~75)であるが、ロクロによるナデ調整が内面外面に施されている。小破片で全形を推測できるものはない。

(4) 施釉陶器(第17図76) 灰釉陶器の皿の破片が1点出土している、丁寧にロクロ調整されて底部もヘラ切り後、整形されている。内面に施釉前になされた線刻が認められる。

(5) 瓦(第17図79、80) 布目瓦片が2点出土している。両方とも外面にきロクロ調整されており、内面には布目痕が認められる。

(6) 中世・近世陶磁器(第17図81、82、87~89、91、92) 越前系のすり鉢片(81、82、84)と珠州系の甕片と近世のすり鉢片(83、85、86)、割高台(90)、ひょうそく(92)などが出土している。

## 2 土製品(第18図12~13)

土製品としては土錘が3点出土した(第18図12、13等)。長さ35mmのもので小型である。いずれもSD1の溝跡からの出土である。

## 3 石製品(第18図1~10、14~19)

石製品としては、線刻礫・磨石・砥石・縄文時代の石器があげられる。線刻礫は長さ94cmほどのもので平坦面に多数の細かいキズが残されている。砥石は金属製品を対象に利用されたと思われ、かなり消費されて小さくなっている。おもに泥岩を素材としている。石鏃と石篋が出土している。有茎のもので縄文時代晩期以降のものと考えられる。

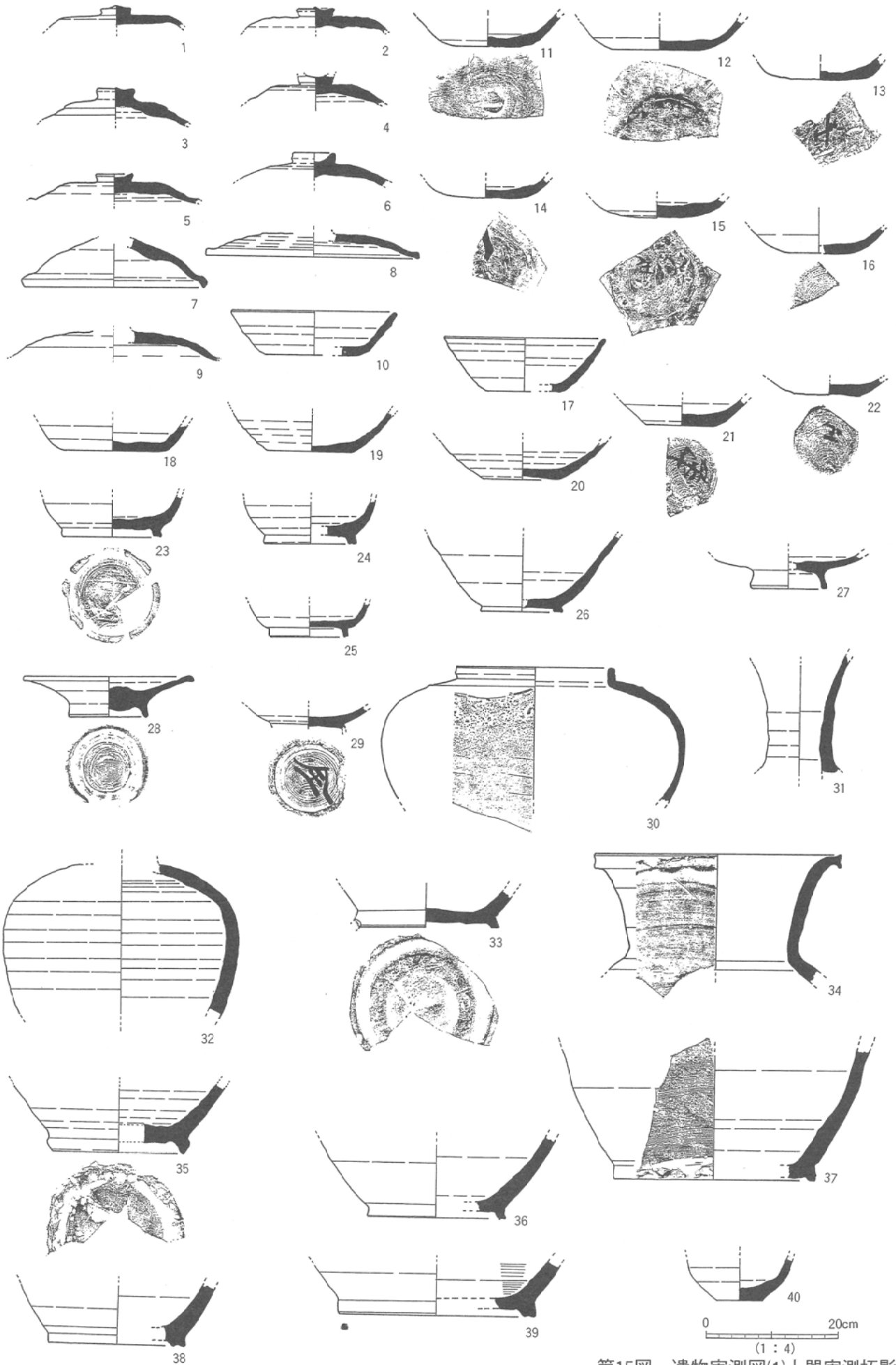
4 古銭(第18図20~24) 6点出土したが、遺存状態の良い5点を図示した。初鑄年は960~1086年頃で河川跡(SG500)、溝跡(SD142)から出土した。

## 5 木製品(第19図)

木製品としては、井戸板材のほかに齋串・箸・加工された板材などがある。

齋串は6点出土しており、長さ10.5cm~26cm、幅1.1cm~2.3cmを測る。いずれも井戸跡(SE108)からの出土で呪術的な使用が考えられる。7は側辺に刻み跡がある。

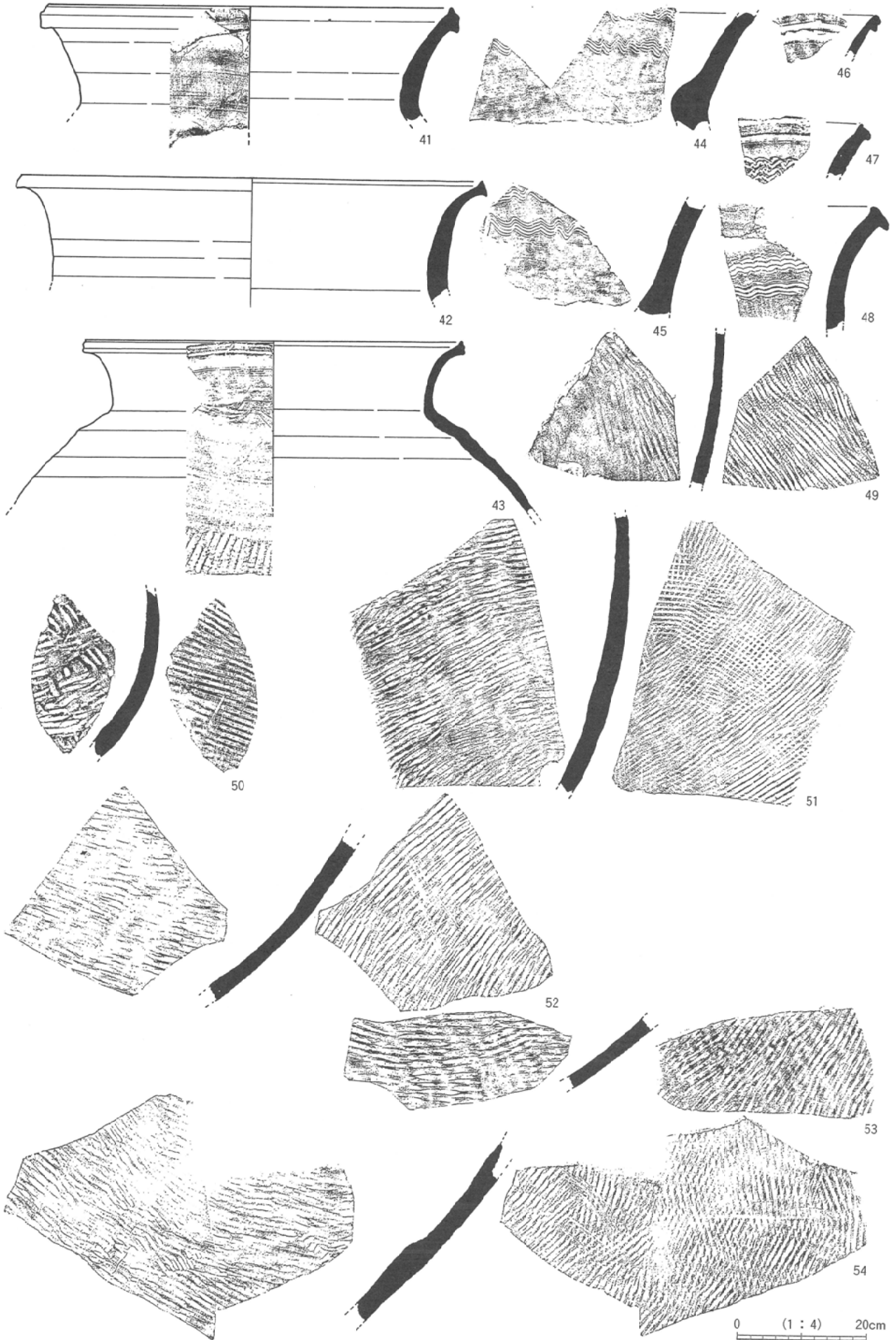
箸は10点出土したが、すべて折れているものや小片で4点ほど図示した。小刀等できれいに削っている。折れた後に井戸に投げ捨てたものと思われる。



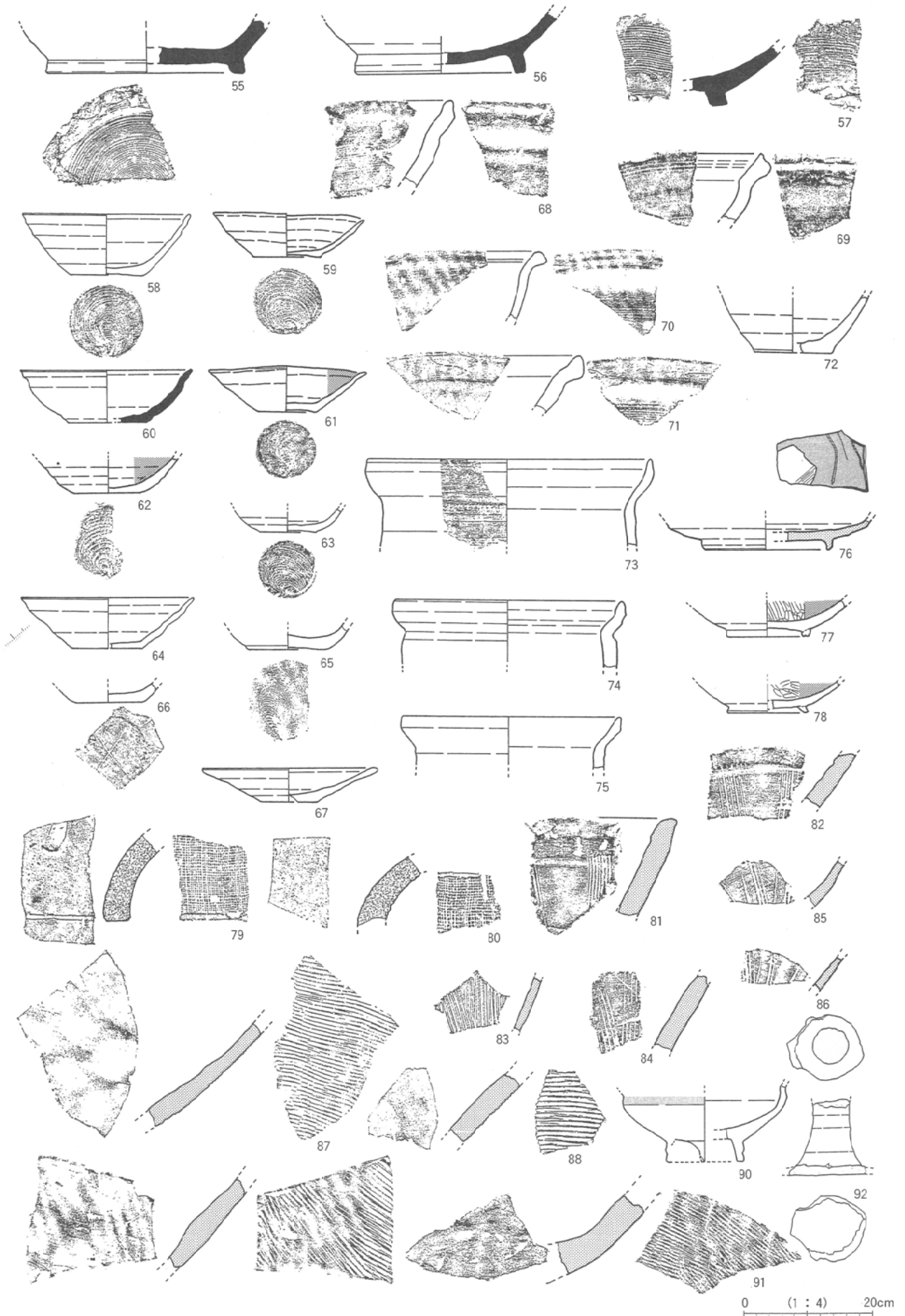
第15図 遺物実測図(1)土器実測拓影



IV 遺物

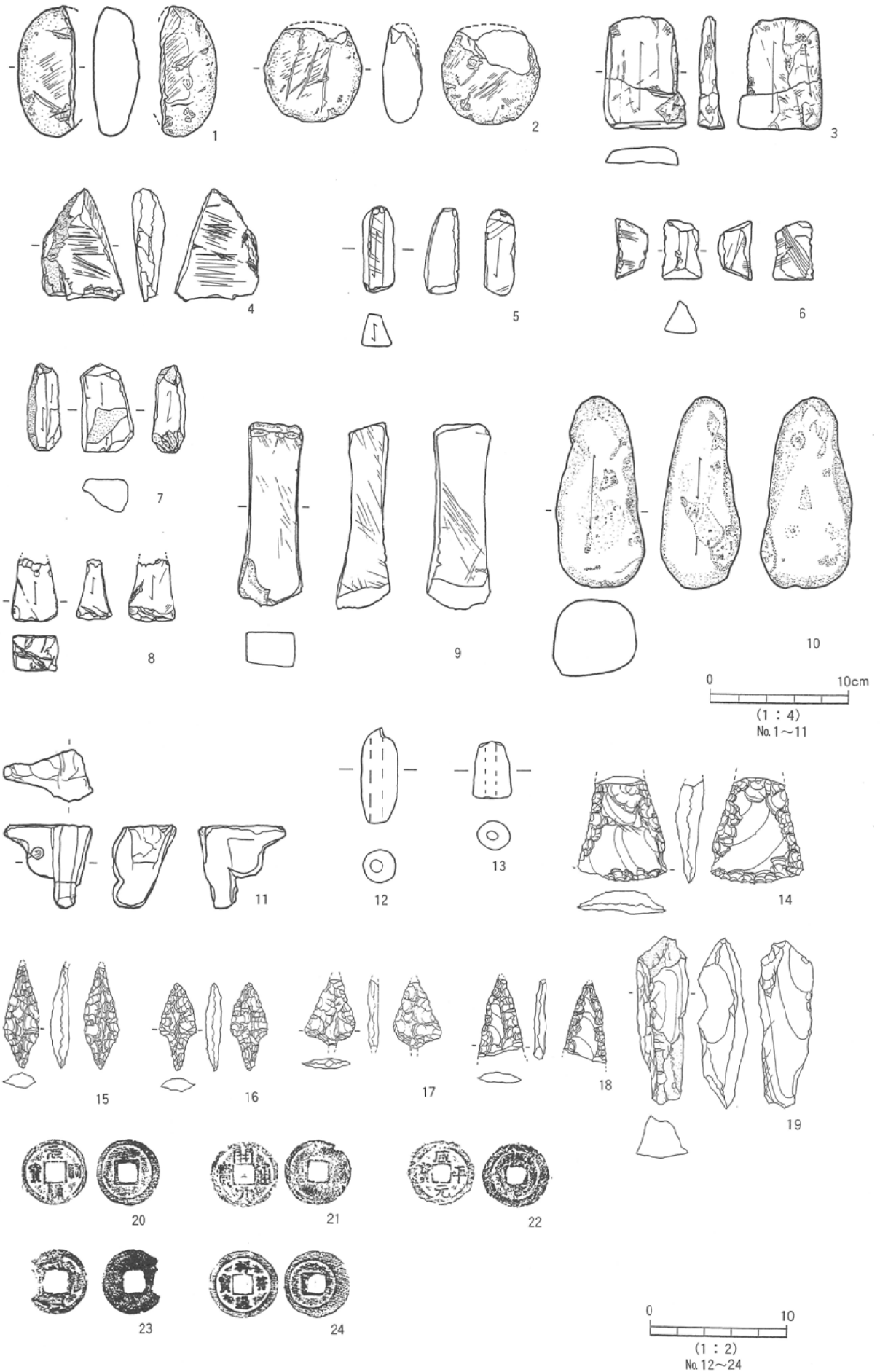


第16图 遺物実測図(2)土器実測拓影



第17図 遺物実測図(3)土器実測拓影

IV 遺物



第18図 遺物実測図(4)石製品他

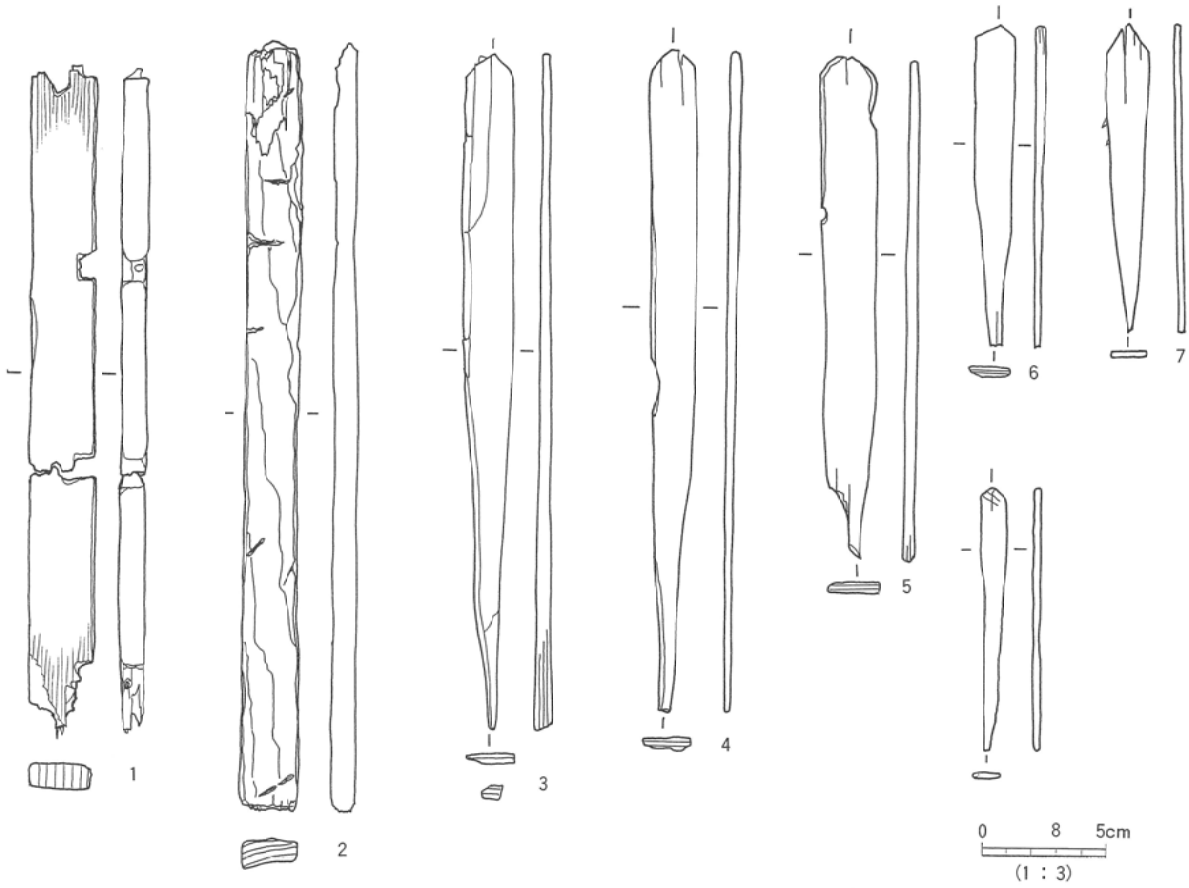
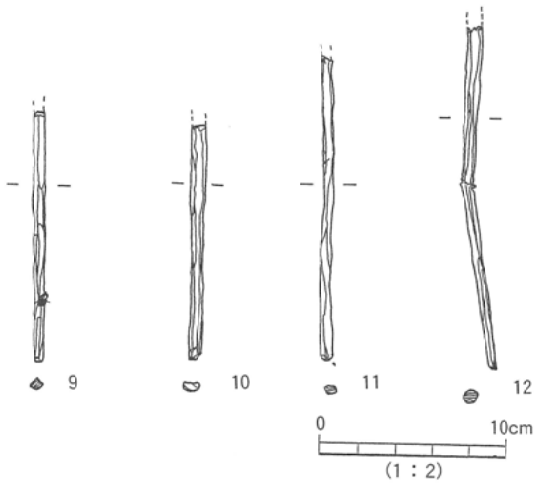


表-3 木製品観察表

挿 図	遺物 番号	種 別	計測値mm			破損の 有 無 部 位	調 整	出土 位置	備 考
			最大長	最大幅	厚さ				
19	1	板状 木製品	268	26	10	両端 欠損	挟り2カ所 木釘有り 鉋	S D 71 R W 43	墨書あり 判読不可
	2	板状 木製品	410	31	14		長軸方向に キズ多数	S E 108 F 18	
	3	斎 串	218	20	3		鉋	S E 108 F 14	
	4	斎 串	260	18	5		鉋	S E 108 F 14	
	5	斎 串	200	23	5	基部 欠損	鉋	S E 108 F 14	
	6	斎 串	130	15	4		鉋	S E 108 F 14	
	7	斎 串	124	14	2		側辺に キザミ跡	S E 108 F 14	
	8	斎 串	105	11	-		鉋	S E 108 F 14	
	9	箸	136	5	-	欠損	小刀での ケズリ痕	S E 108 F 14	
	10	箸	93	6	-	欠損	小刀での ケズリ痕	S E 108 F 14	
	11	箸	97	4	-	欠損	小刀での ケズリ痕	S E 108 F 14	
	12	箸	120	5	-	欠損	小刀での ケズリ痕	S E 108 F 14	



第19図 遺物実測図(5)木製品

IV 遺物

表一 4 遺物観察表(1)土器

挿 図	遺物 番号	種別	器種	計測値 mm				底部切離し	調整技法		出土地点	備考
				口径	底径	器高	器厚		外 面	内 面		
	1	須恵器	蓋			14	6		ロクロ調整	ロクロ調整	S D 71	
	2	須恵器	蓋			18	7		ロクロ調整	ロクロ調整	5-14Ⅲ	
	3	須恵器	蓋			27	7		ロクロ調整	ロクロ調整	5-16Ⅲ	
	4	須恵器	蓋			21	5		ロクロ調整	ロクロ調整	8-15Ⅲ	
	5	須恵器	蓋			21	12		ロクロ調整	ロクロ調整	B区	
	6	須恵器	蓋			23	7		ロクロ調整	ロクロ調整	5-14Ⅲ	
	7	須恵器	蓋			22	6		ロクロ調整	ロクロ調整	6-17Ⅲ	
	8	須恵器	蓋			18	5		ロクロ調整	ロクロ調整 酸化鉄付着	Ⅲ	
	9	須恵器	蓋			18	7		ロクロ調整	ロクロ調整	S D 1	
	10	須恵器	坏	130	75	33	5	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S E 108	
	11	須恵器	坏		55	21	5	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S P 16	
	12	須恵器	坏		72	20	5	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S K 497	
	13	須恵器	坏		65	12	7	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	5-16	底部墨書あり
	14	須恵器	坏		70	11	8	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S E 108	底部墨書あり
	15	須恵器	坏		55	12	5	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	5-15	底部墨書あり[生]
	16	須恵器	坏		50	16	5	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S K 497	
	17	須恵器	坏	118	50	39	5	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S D 113	
	18	須恵器	坏		84	21	6	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	B区 R P 15	
	19	須恵器	坏		63	29	6	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S K 453 R P 23	
15	20	須恵器	坏		56	29	4	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S D 71	
	21	須恵器	坏		55	18	7	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	B区	底部墨書あり
	22	須恵器	高台付坏		48	10	6	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	Ⅲ	底部墨書あり
	23	須恵器	高台付坏		74	38	7	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	9-15Ⅲ	
	24	須恵器	高台付坏		85	31	6	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	R P 19	
	25	須恵器	高台付坏		60	24	4	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S K 497	
	26	須恵器	高台付坏	144	62	57	7	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S D 1 13	
	27	須恵器	高台付坏		60	26	4	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	B区	
	28	須恵器	高台付皿	128	62	30	6	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整 酸化鉄付着	B区	
	29	須恵器	高台付坏		52	16	4	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S D 113	墨書土器『金』
	30	須恵器	壺	123		100	5	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S K 453	
	31	須恵器	壺			96	7	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S K 497	
	32	須恵器	壺				11	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S E 108	
	33	須恵器	壺		112	27	9	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S K 453 R P 25	
	34	須恵器	壺	194		94	9	ヘラ切り	ロクロ調整 ナデ	ロクロ調整	S K 453 R P 30	
	35	須恵器	壺		10	49	8	ヘラ切り	ロクロ調整 タタキ	ロクロ調整	S D 71	高台付き
	36	須恵器	壺			62	8	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S D 1	高台付き
	38	須恵器	壺		108	43	12	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	R P 12	高台付き
	39	須恵器	壺		160	44	10	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	6-15Ⅲ	
	40	須恵器	壺		40	32	5	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整 ハケ調整	4-15Ⅲ	
	41	須恵器	甕	310		90	13		ロクロ調整 タタキ	ロクロ調整	B区Ⅲ	
	42	須恵器	甕	356		92	12		ロクロ調整	ロクロ調整	8-15Ⅲ	
	43	須恵器	甕	288		129	9		ロクロ調整		S K 453	
	44	須恵器	甕			83	15		ロクロ調整 条線状タタキ	ロクロ調整 アテ	S D 113	
	45	須恵器	甕			85	14		ロクロ調整 櫛書き波状文	ロクロ調整	B区	
	46	須恵器	甕			34	6		ロクロ調整 櫛書き波状文	ロクロ調整 アテ	S D 71	
	47	須恵器	甕			39	9		ロクロ調整	ロクロ調整	S K 497	
	48	須恵器	甕			96	13		ロクロ調整 櫛書き波状文5条	ロクロ調整 ナデ	B区Ⅱ	
	49	須恵器	甕			114	8		ロクロ調整タタキ櫛書き波状文5条	ロクロ調整 ナデ	S K 453	
	50	須恵器	甕			130	10		タタキ	アテ	S K 497	
	51	須恵器	甕			210	14		タタキ	アテ	S K 453 R P 31	
	52	須恵器	甕			150	11		タタキ	アテ	S K 453	
	53	須恵器	甕			71	9		タタキ	アテ	S K 453	
	54	須恵器	甕			167	16		タタキ	アテ	S D 40 R P 7	
	55	須恵器	壺		160	33	13	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S P 16	
	56	須恵器	壺		132	46	9		ロクロ調整	ロクロ調整	S K 453 R P 24	台付き
	57	須恵器	壺				12		ロクロ調整	ロクロ調整	S K 497	台付き
	58	あかやき土器	坏	130	56	46	4	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	9-6Ⅲ	
	59	あかやき土器	坏	118	52	35	4	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S K 453 R P 32	
17	60	須恵器	坏	130	60	40	5	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	5-14Ⅲ	
	61	土師器	坏	122	46	34	4	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S K 453	内墨処理
	62	土師器	坏		54	25	5	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S K 453	底部ヘラケズリ内墨処理
	63	あかやき土器	坏		43	16	4	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S D 71	
	64	あかやき土器	坏	134	53	39	5	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S K 453	
	65	あかやき土器	甕		63	14	7	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	S E 108	

表一 5 遺物観察表(2)土器

挿図	遺物番号	種別 器種	計測値 mm				底部切離し	調整 技法		出土地点	備考
			口径	底径	器高	器厚		外 面	内 面		
17	66	あかやき土器 坏		55		6	回転糸きり	ロクロ調整	ロクロ調整	SE108	底部「」のカマ印
	67	あかやき土器 皿	135	45	26	4	回転糸きり	ロクロ調整	ロクロ調整	SE108	
	68	あかやき土器 なべ				11		ロクロ調整	ロクロ調整 口縁部ハケメ	SD71	
	69	あかやき土器 なべ				10		ロクロ調整	ロクロ調整	SK96	
	70	あかやき土器 なべ				6		ロクロ調整	ロクロ調整 すす付着	SE108	
	71	あかやき土器 なべ				10		ロクロ調整	ロクロ調整	SE108	
	72	あかやき土器 甕		60	43	7		ロクロ調整	ロクロ調整	SK479	
	73	あかやき土器 甕	218			9		ロクロ調整	ロクロ調整	RP4	
	74	あかやき土器 甕	192			9		ロクロ調整	ロクロ調整 すす付着	SD1	
	75	あかやき土器 甕	170			8		ロクロ調整	ロクロ調整	SD1	
	76	灰釉陶器 皿		96		5	ヘラ切り	ロクロ調整 灰釉	ロクロ調整	SD1	灰釉 高台付き土器
	77	土師器 高台坏		65		6	静止糸きり	ロクロ調整	ロクロ調整 ミガキ	SD1	内黒処理加により火い痕あり
	78	土師器 高台坏		80		5	回転糸きり	ロクロ調整	ロクロ調整 ミガキ	SD1	内黒処理
	79	瓦 丸瓦				18		ロクロ調整 ナデ	布目痕	RP37	
	80	瓦 丸瓦				19		ロクロ調整 ナデ	布目痕	B区	
	81	中世陶器 すり鉢				17		ロクロ調整	ロクロ調整 櫛書き条線	SP472	すす付着 越前系
	82	中世陶器 すり鉢				12		ロクロ調整	ロクロ調整 櫛書き条線		越前系
	83	近世陶器 すり鉢				6		ロクロ調整	ロクロ調整 条線状タタキ	A区	
	84	中世陶器 すり鉢				13		ロクロ調整	ロクロ調整 条線状タタキ	II層	越前系
	85	近世陶器 すり鉢				8		ロクロ調整	ロクロ調整 条線状タタキ	SD497	
	86	近世陶器 すり鉢				6		ロクロ調整	ロクロ調整 条線状タタキ	5-16II	
87	珠州焼 甕				11		条線状タタキ	アテ	A区		
88	珠州焼 甕				17		条線状タタキ	アテ	A区		
89	珠州焼 甕				15		条線状タタキ	アテ	C区		
90	近世陶器 割高台		60	51	5		ロクロ調整 白釉	ロクロ調整	9-14II		
91	珠州焼 甕				20		条線状タタキ	アテ	B区		
92	近世陶器 ひょう足				56		ロクロ調整 鉄釉		II層		

遺物観察表(3)石製品他

挿図	遺物番号	種別 器種	計測値 mm			破損の有無	調 整	出土地点	備考
			最大長	最大幅	厚さ厚				
18	1	線刻磔	94	42	35	半分欠損	両面中央部を磨いている。	SD71F	細かいキズ有り 泥岩
	2	線刻磔	69	71	32	先端欠損	両面磨いている。側面にたたき痕。	A区II層	細かいキズ有り
	3	砥石	81	53	11	折れ	両面研いでいる。	A区II層	砂岩
	4	砥石	81	57	23		両面側面研いでいる。	5-14III層	細かいキズ有り 泥岩
	5	砥石	62	23	24		全面にわたって研いでいる。	E区II~III	細かいキズ有り 泥岩
	6	砥石	43	25	23		全面にわたって研いでいる。	表採	細かいキズ有り
	7	砥石	63	38	24		側面を研いでいる。	A区	
	8	砥石	45	32	20	半分欠損	全面にわたって研いでいる。	6-15II~III	細かいキズ有り
	9	砥石	132	47	38		両面で研いでいる。	SD71F3	細かいキズ有り
	10	磨石	139	62	54		両面で研いでいる。	SD142 RQ42	
	11	火鉢の足	59				脚部に相当する。取り付け部分で破損。	B区II層	
	12	土錘	35	13			楕円形	A区III層	穴径 4 m
	13	土錘	21	14			弾丸形	8-15III層	穴径 3 m
	14	石筥	39	34	9	基部欠損	背面 腹面の周辺加工	SG500 RQ16	
	15	石鏃	37	13	6		両面加工 舌部有り	SD71	
	16	石鏃	33	15	6		両面加工 舌部有り	7-15III	
	17	石鏃	23	18	4	欠損	両面加工 舌部有り	4-15II	
	18	石鏃	28	16	3	欠損	両面側面加工	8-15III	
	19	石器剥片	62	16	15			SG500	自然面あり
	20	古銭『咸元通寶』	24		1			SD142	初鑄998年 北宋
	21	古銭『開元通寶』	23		1			SD71	初鑄960年 南宋
	22	古銭『元祐通寶』	25		1				初鑄1086年 北宋
	23	古銭『不明』	23		1	一部欠損			
	24	古銭『祥符通寶』	24		1			6-17	初鑄1009年 北宋

## V まとめ

### 1 調査のまとめ

向田遺跡は、およそ10,000㎡の広がりを持つ。そのうち約3,500㎡について発掘調査を実施した結果、多数の遺構と遺物が出土した。調査の成果をいくつかまとめると以下のようになる。

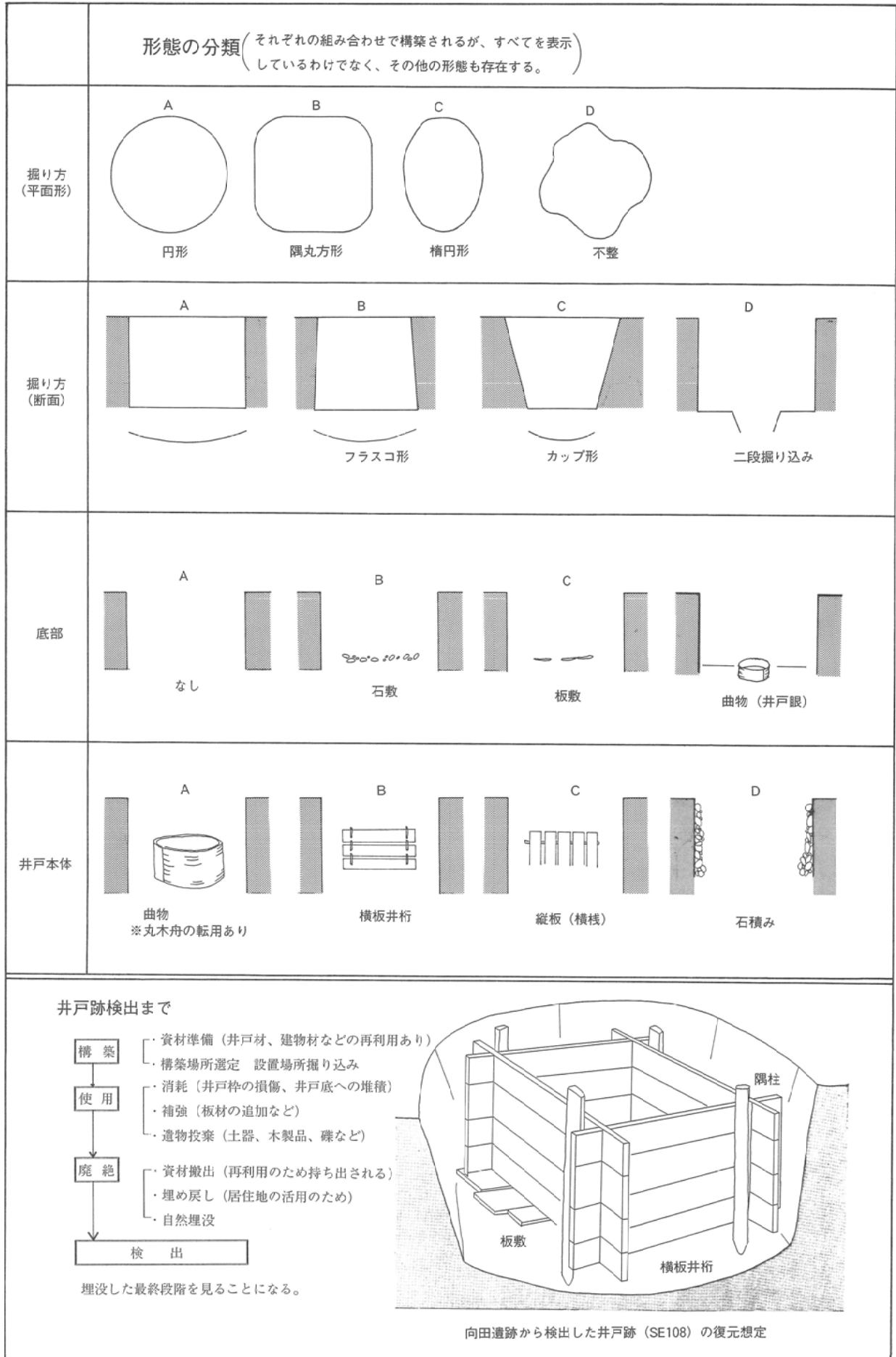
まず第1に、発見された遺構は平安時代と中世以降の2時期に分けられる。平安時代の遺構は建物跡（S B 1）・井戸跡（S E 108）・土壙（S K 96、453、497など）・溝跡（S D 1、26、300など）で出土した遺物などから10世紀後半の年代が想定される。中世以降の遺構は、溝跡（S D 113、118、142）・土壙（S K 128）・牛耕跡などであり、溝跡からは古銭も出土した。遺物は少なかったが縄文時代の石器と土器片が河川跡（S G 500）から出土している。河川上流域に縄文時代の集落が存在するようである。調査中、地表下50 cm（標高6.2 m）から埋没した自然木が5カ所から出土している。樹種はケヤキであり自然堤防上に安定して繁茂していたと思われる。ケヤキの植樹は屋敷林・防風林として、現在の集落でも見られる。

第2に井戸跡（S E 108）の調査で出土した井戸枠板材の観察から、板材は建築部材の転用の可能性が高いことがわかった。枠組に関係の薄い加工や穿孔の観察は、当時の建物構造を探る上でも重要な分野となろう。

### 2 城輪柵跡周辺の井戸跡分類

出羽国府跡に擬定される『城輪柵』遺跡の周辺には、多数の古代から中世にかけての遺跡が存在し、これまで数多くの遺跡が調査されている。集落を構成する建物跡とともに、井戸跡も多数検出されている。両者はあたかも付随する関係にあるとも言える。以前、井戸の構造や年代について野尻 侃（1982）によって集成されたことがある。その後の資料の増加もあり、1982年以降の集成と分類を試みた（表-6参照）。

井戸跡は、掘り方の規模や井戸枠出土から、遺構精査前に大方判明することが多い。そして、調査して、我々が眼前にするのは井戸が廃棄された最後の状況が埋没したものである。よって、いかなる構造で、いつの時期で、どのような廃棄までのプロセスがあったのか探ることになる。以上の視点で、堆積層・遺物の位置や種類・井戸本体の構造を観察記録している。井戸は平面断面そして本体の構築プランがある。多様なパターンがあるため、個々の事例を区分し、その組み合わせが井戸を構成するものとして分類を行った（第20図）。観察項目は、①掘り方平面②断面③井戸底④井戸本体とした。ただ、井戸板材など廃棄時に持ち出されるケースもあつたり、土壙としたものでも素掘りの井戸であつたりし、なお細部での検討が必要である。また、上部に横板井桁、下部に縦板と井戸本体を2段にしている例もある。曲物は井戸眼として多用される傾向がある。特殊なものに丸木舟の利用があげられる。井戸構築時のポイントは壁の保全と浄化にある。さらに細部の造作等観察する視点は多く、構造上の変化など課題は多い。



第20図 井戸跡分類図



表一 6 庄内地方井戸跡出土例一覽(2)

\*1982 野尻 侃「庄内地方の井戸跡出土例」『西田遺跡第2次発掘調査報告書』山形県教育委員会に続くもので1983から1989年まで収録。

番号	遺跡 遺構名	所在地	井戸本体				掘り方		出土遺物	発見年度	
			素材	形態	構造	規模(深さ)	底	平面形			規模(深さ)
49	庭田 S E 110	酒田市大字庭田字中村	木組	方形	縦板 横棧	82×82(110)		方形	100×100(110)	須恵器 曲物	1983
50	S E 62		木組	?	?	?		隅丸方形	155×130(105)	珠州系陶器	
51	豊原 S E 44	酒田市大字豊原字榊田	素掘り	円形		径370(270)	曲物	不整形	140×92(80)	越前焼	1983
52	関B2次 S E 30	酒田市大字関字村ノ内	木組	方形	横板井桁 曲物	135×135(250)	石敷	不整形	360×330(145)	須恵器 あかやき 曲物	1983
53	S E 41		木組	方形	横板 隅柱	130×130(130)		不整楕円形	径400(200)	中世陶器 漆器	
54	沼田 S E 10	酒田市大字大島田沼田	木組	円形	縦板	径46(12)	曲物	不整楕円形	180×160(120)	須恵器 あかやき	1984
55	新青渡2次 S E 250	酒田市大字新青渡字家際	木組	方形	?	?		不整楕円形	320×290(117)	木製品	1984
56	S E 260		木組	方形	横板井桁	40×40(50)			径110(85)	須恵器 あかやき	
57	高阿弥田 S E 2	酒田市大字横代字高阿弥田	木組	方形	縦板横棧 隅柱	68×65(120)	曲物	隅丸方形	165×140(105)	須恵器 あかやき曲物 箸	1985
58	S E 3		木組	方形	縦板横棧 隅柱	90×86(110)	曲物	方形	110×100(100)	あかやき 内黒	
59	S E 4		木組	方形	横板井桁	80×75(30)		方形	95×95(35)	須恵器	
60	S E 136		木組	方形	縦板横棧 隅柱	?		?		?	
61	手蔵田2 S E 2	酒田市大字手蔵田字小堤	木組	方形	横板井桁	50×50(130)	曲物	隅丸方形	110×110(120)	須恵器 あかやき 斎串	1985
62	手蔵田12 S E 42	酒田市大字手蔵田字村上	木組	方形	縦板横棧	85×75(?)		楕円形	200×145(90)	あかやき 土師器	1985
63	S E 45		木組	方形	横板井桁 縦板横棧	90×85(240)		隅丸方形	210×210(90)	須恵器 あかやき土師器	
64	S E 167		木組	円形	縦板	径80(100)	曲物2	楕円形	156×142(140)	須恵器 あかやき 箸	
65	下餅山 S E 52	松山町大字下餅山谷地田	木組	円形	縦板 隅柱	径70(50)	曲物	円形	90×80(120)	近世陶磁器	1986
66	手蔵田 S E 29	酒田市大字手蔵田字小堤	木組	円形	縦板 隅柱	径60(120)	石敷曲物	不整円形	180×180(120)		1986
67	S E 33		木組	方形	縦板横棧 隅柱	80×80(55)	曲物	楕円形	160×160(165)		
68	S E 119		木組	方形	縦板横棧 隅柱	90×90(120)	曲物	楕円形	200×200(110)	あかやき 須恵器	
69	南興野 S E 54	酒田市大字新青渡字大坪	木組	方形	横板井桁 縦板横棧	108×80(100)		隅丸方形	254×215(228)		1986
70	S E 61		木組	方形	横板井桁	(100)		円形	180×170(85)	土器42点	1987
71	S E 63		木組	方形	横板井桁	70×70		円形	200×180(185)	内黒 須恵器斎串など	
72	S E 203		木組	円形	丸木舟利用	120×60		不整円形	200×190(166)	内黒 須恵器あかやき	
73	桜林興野 S E 84	平田町大字桜林興野字東田	木組	方形	縦板横棧	100×100(75)		方形(切り合い)	120×110(75)	中世?	1987
74	S E 94		木組	方形	縦板			隅丸方形	135×120(88)	板小片	
75	S E 91		?								
76	上曾根 S E 93	酒田市大字上野曾根字上曾根	木組	方形	縦板横棧	65×65(132)		円形	180×170(110)		1987
77	生石2 S E 101	酒田市大字生石字堀野新田	木組	方形	横板井桁	90×90(100)		方形	170×170(100)	須恵器 あかやき	1987
78	S E 250		木組	方形	横板井桁	90×90(60)		方形	220×210(80)	須恵器 あかやき	
79	S E 490		木組	方形	横板井桁	100×100(40)		方形	200×180(70)	須恵器 あかやき	
80	生石4 S E 1	酒田市大字生石字堀野新田	木組	方形	縦板 横棧 隅柱	70×70(180)	石敷	方形	190×150(200)	須恵器3点	1987
81	S E 2		木組	方形	縦板 丸木舟枠	70×70(130)		隅丸方形	105×95(94)	須恵器 箸 斎串	
82	大楯 S E 171	遊佐町大字小深田字大楯	木組	円形		径50(20)	石敷曲物	楕円形	130×90(50)	漆碗 中世	1988
83	S E 186		木組	方形	縦板 斜め板	70×70(50)		?	90×90(80)		
84	S E 205		木組	方形	縦板横棧	100×100(50)	石敷	長方形	320×60(70)	かわらけ 漆器	
85	S E 338		木組	方形	縦板横棧	100×100(50)		方形	160×160(70)		
86	南興野2次 S E 64	酒田市大字新青渡字南大坪	木組	方形	縦板横棧	120×110(200)		楕円	150×130(98)	須恵器 墨書土器 斎串	1988
87	S E 101		木組	方形	横板井桁	90×80(54)		不整楕円形	165×160(147)	須恵器 あかやき 斎串	
88	S E 104		木組	円形		径35(20)径42(35)	曲物2	隅丸方形	140×110(82)	あかやき 斎串	
89	S E 49?										
90	S E 62?							円形	?	須恵器 曲物	
91	熊野田 S E 110	酒田市大字熊野田字高砂	木組	方形	横板井桁	110×105(?)		不整円形	130×130	須恵器 あかやき 墨	1988
92	手蔵田 S F 41	酒田市大字手蔵田字村上	木組	円形	曲物	径50(55)	曲物	楕円形	140×140(120)	須恵器 あかやき	
93	S E 584		木組	?		径80(150)		楕円形	130×130(?)	須恵器 あかやき	
94	S E 639		木組	方形	縦板横棧 隅柱	56×45(110)	曲物	?	90×90(100)	須恵器 あかやき	
95	桜林興野 S E 64	平田町大字桜林興野字東田	木組	方形	縦板 隅柱 曲物	80×70(80)		楕円形	100×80(90)	須恵器 あかやき	1988
96	矢馳 A S E 15	鶴岡市	木組	方形	縦板横棧 曲物	80×80(120)	曲物	円形	170×170(120)	掘り方から土師器片	1988
97	大概新田 S E 33	酒田市大字大概新田字概の下	木組	円形	曲物 たが	?		不整円形	110×100(115)	中世	1989
98	S E 88		木組	?		60×60(100)		円形	120×120(120)	中世	
99	大概新田 S E 34		木組	方形	縦板横棧 曲物	55×55(140)	石敷曲物	隅丸方形	160×160(140)	須恵器 あかやき片	1989
100	S E 44		木組	方形	横板井桁 縦板	60×60(100)		円形	120×120(120)	須恵器 あかやき片	

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	むかいだいせきはつくつちようさほうこくしよ							
書名	向田遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第34集							
編集者名	石井浩幸 齊藤 健							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上市市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301							
発行年月日	西暦 1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むかいだ 向田	やまがたけん 山形県 さかたし 酒田市 おおあざもとたて 大字本楯 あざむかいだ 字向田	6204	平成6年度 登録	38度 58分 10秒	139度 53分 00秒	19950508 ～19950706	3,500	県営ほ場 整備事業 (西荒瀬地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
向田	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡 土 壙 井戸跡 溝 跡 畝 跡 河川跡	須恵器（蓋、坏、壺、甕） あかやき土器（坏、甕） 砥石 古銭 斎串 箸 井戸枳材		自然堤防上の集 落。板敷きの井戸 跡を検出。		

圖 版



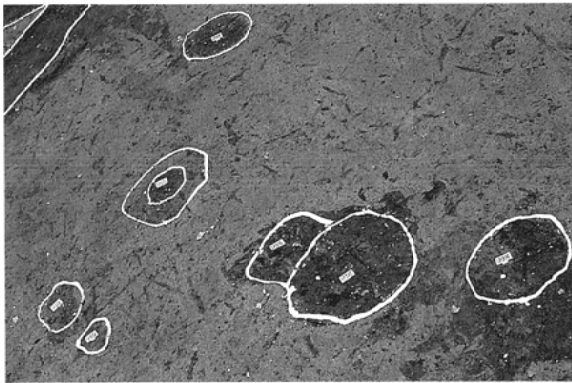
遺跡上空から（航空撮影）



調査風景（遺構検出）



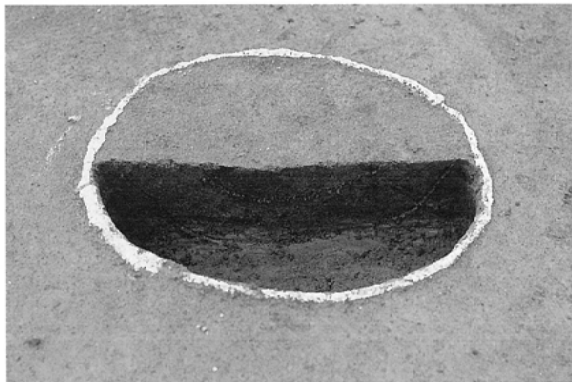
S B 1 (掘立柱建物跡) 南から



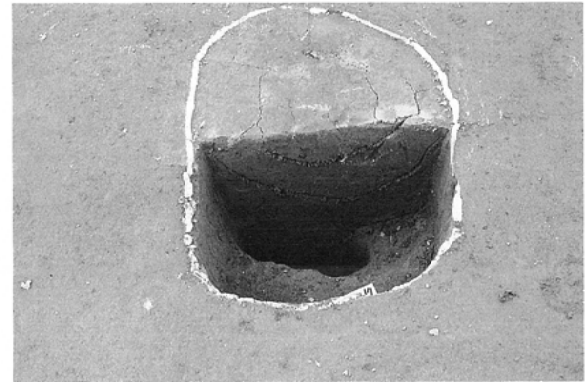
柱跡 S P 312~318



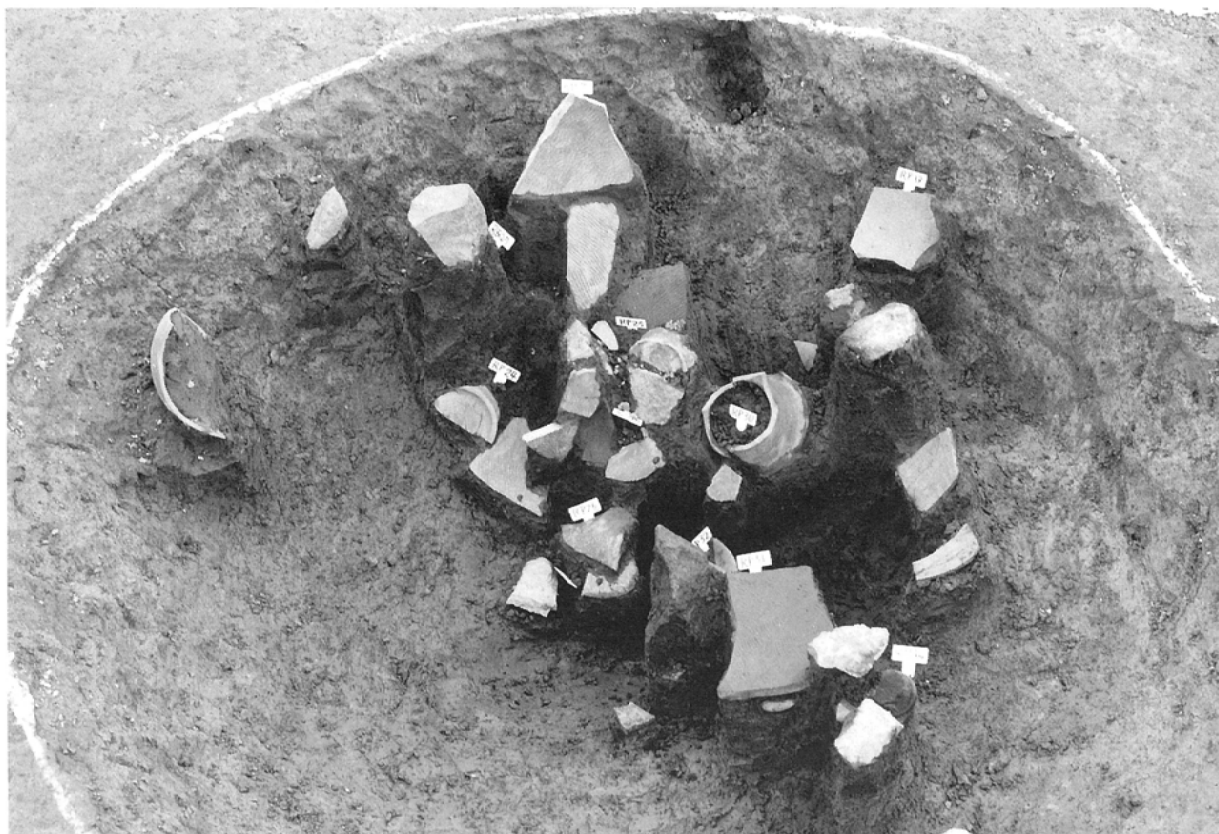
D区 S P 271~273・S P 304~308



S P 16



S P 17



S K 453 遺物出土状況



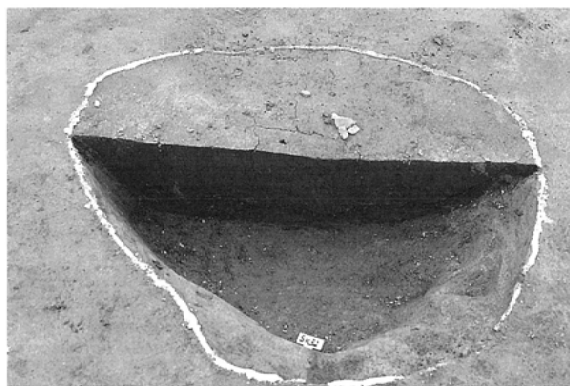
S K 96



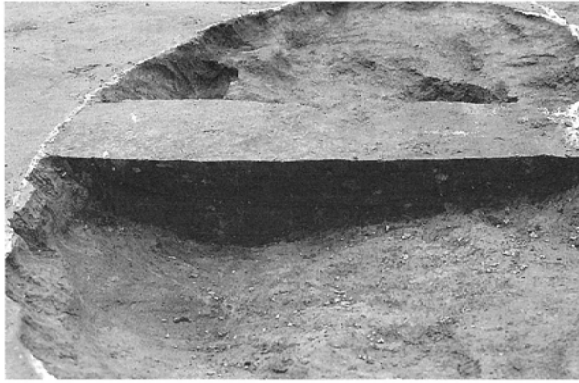
S K 497



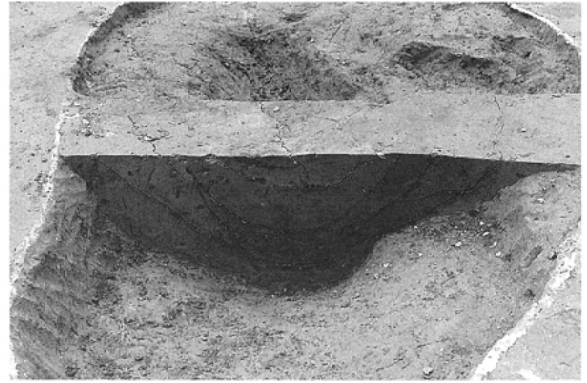
S K 128



S K 32



SD 1



SD 26



A区



SD 240



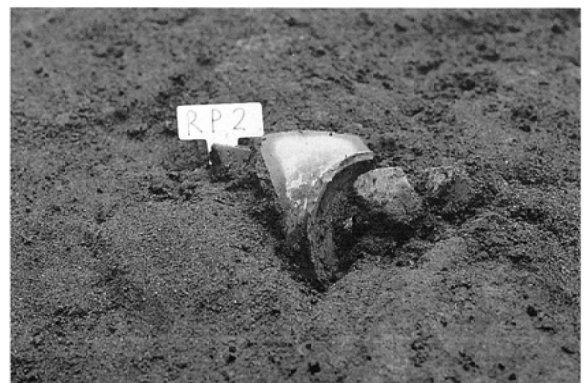
畝跡群 (SD 192~194)



B区 牛耕跡



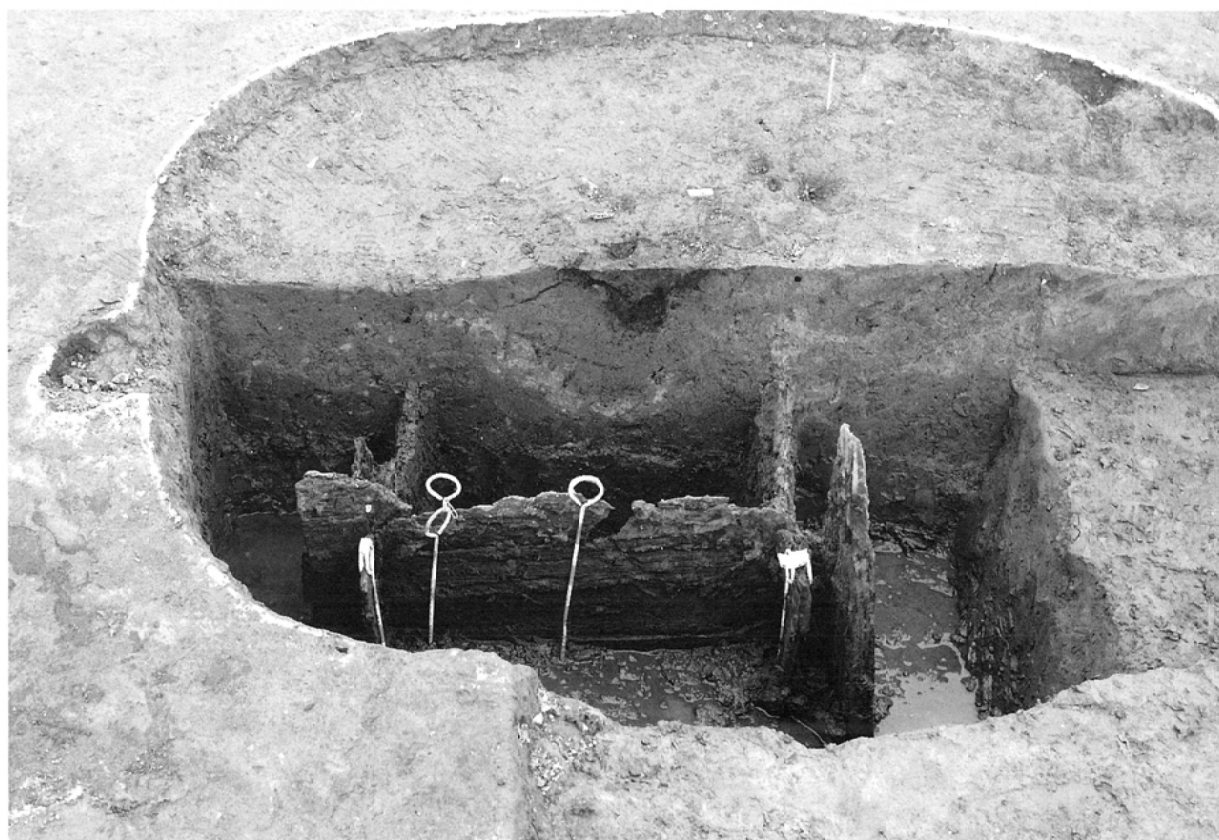
木製品 (第19図1) 出土状況 SD 71内



須恵器壺底出土状況 (第15図23)

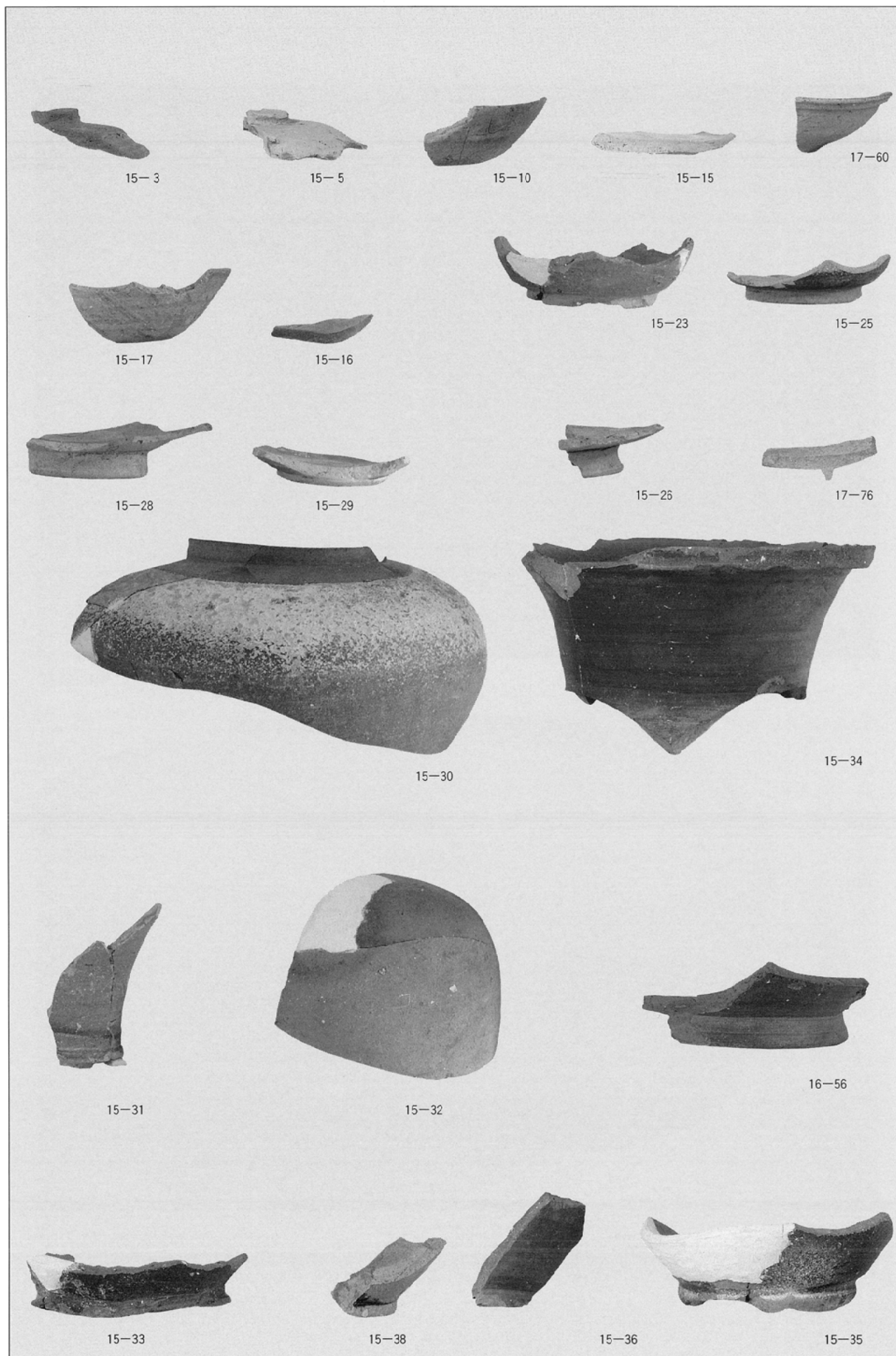


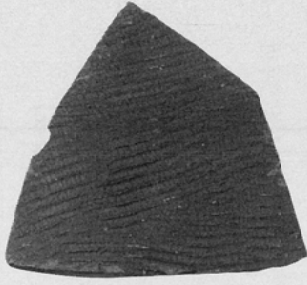
S E 108 (井戸跡) 検出状況



S E 108 (井戸跡) 土層断面



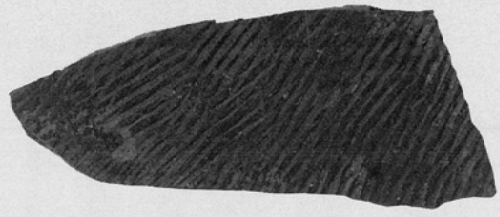




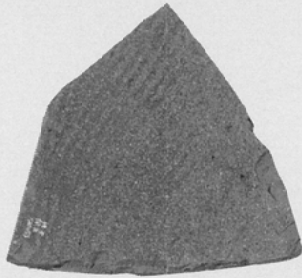
16-49表



16-50表



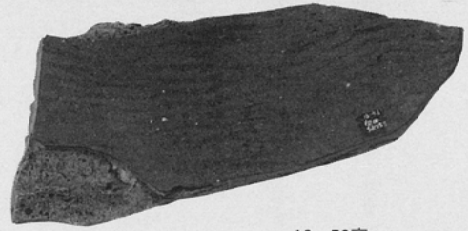
16-53表



16-49裏



16-50裏



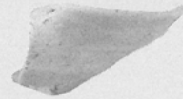
16-53裏



17-58



17-59



17-64



17-63



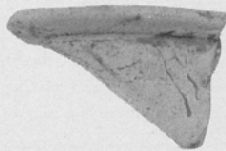
17-61



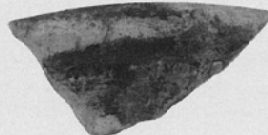
17-72



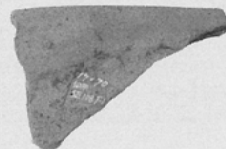
17-65



17-70表



17-71表



17-70裏



17-71裏



17-74表



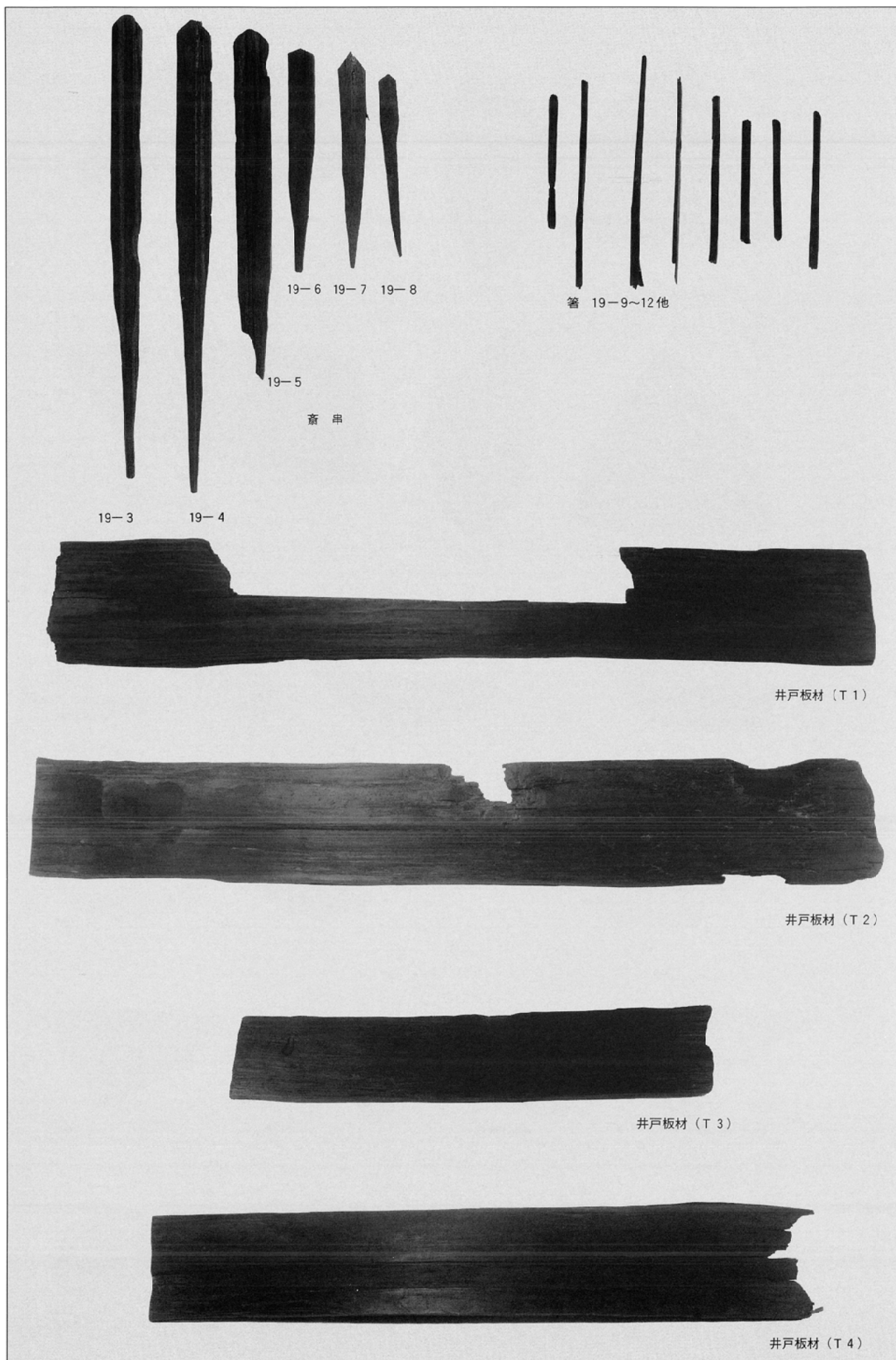
17-75表



17-74裏



17-75裏



---

山形県埋蔵文化センター調査報告書第34集

むかいだ  
向田遺跡発掘調査報告書

1996年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化センター  
〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号  
電話 0236-72-5301  
印刷 (株)大風印刷

---